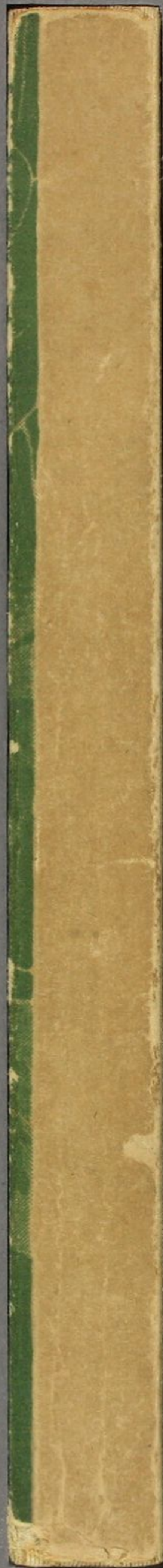
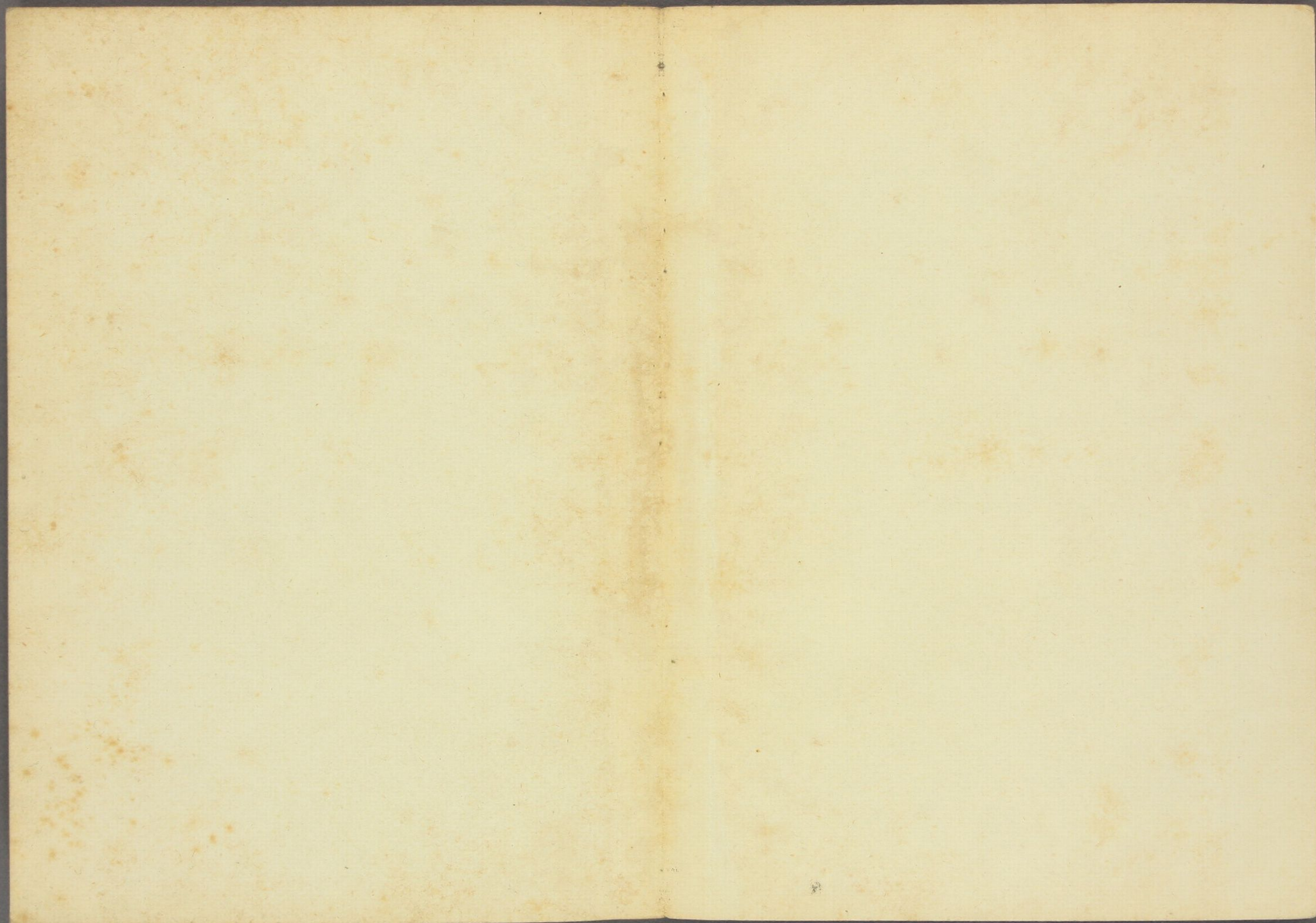


# 短笛与报









短  
笛  
長  
鞭

坂  
童  
作

短笛長鞭に序す

さしも華麗を極めたるソロモンの美も、終に野生一莖の百合花が美に如かざりき。あはれむべきかな。人間徒に綺麗を銜つて虚飾を聯ぬるとや。余は、自然の賛美者として、明に此の著の作者と一致するもの也。

今の世は、是れ衒ひの世なり、阿媚の世なり、造花の世なり。文學また此の病にかゝつて、日に其の弊を増す。彼れらが詩を吟ずるは、詩の爲め

にあらずして名の爲め也。彼れらが文を草するは、  
文の爲めにあずして名の爲め也。余は、此の著の  
作者が、遠く時弊の外に立ち、自ら費を投じ而か  
も深く其の名を包んで、此の詩を世に示さんとす  
るの眞意に敬服す。

著者は、余が親しき友也。曾つて、早稻田の校  
堂にあるや、余は篤學の士として、初めて著者と  
交を結びき。去つて共に放浪の身となるや、常に  
強固なる信念を保持せる友として、更に其の情を  
厚うしき。後相分れて、彼れは海外に官を得、余

は依然たる舊阿蒙を歎いて空しく京華にとどまり  
つゝあるの日、時に意志不撓の好丈夫として、時  
に熱情火のごとき好詩人として、更に深く著者を  
知りき。彼れは、堅く清き信仰を有せりき、ミル  
トンにも劣るまじき堅實なる信仰を有せりき。彼  
れは、バイロンを崇拜せざりき、バイロンを學ば  
ざりき、されど、彼れは生れながらにしてバイロ  
ンに似たる性質を有し、經歷また能くバイロンに  
似たりき。

去歲、波濤幾千里の彼方より、遙に此の詩集を

寄せて曰く、

去る明治廿七八年の頃より作りはじめたる世に  
所謂新体詩とけなざるものうちにて、我が  
意を得たるもの十數篇をぬきだし、他は悉く  
火中し終りぬ。寧ろ此の十數篇も、泡か煙にな  
し終らむとは思ひしも、斯くては何の爲めに思  
を勞し腦を煩せしやとの、心の底より反聲起る  
あり、何となく寶玉を捨つるの感あり、もとよ  
り文學上何の價值もあらざるは火を見るより明  
なりとは言へ、人世の難海に浮びいでたる一葉

の小舟に棹さして、獨力東西にさまよひ、南北  
にたゞよひたる我が人世行路の旅日記、否、旅  
の土産は、あながちに見どころなきにもあらざ  
るべし、是れを一冊になして出版せばやと思ふ  
序に、惡魔が會つて天使たりし時の名残の四篇、  
「我が戀」「ひとりね」「斷腸」「花染衣」を加へ  
て、今便君の坐下に呈す。

と、余は是れを手にして通唱再三、彷彿として作  
者を眼前に見るの心地したりき。豈に嘗に作者を  
眼前に見るのみならむや。余は、此の詩を讀んで、



得たるもの多く、感ずるものまた多かりき。此は、未だ必らずしも、幽遠高邁の詩想をうたへるものにあらず、されど其の懐くところ純清にして高雅、自然にして熱烈の調、また以つて聞くべきにあらずや。此は、措辭の技巧未だ至らず、詞句熟せざるところありといへども、其の文字平明にして純朴、流麗にして率直、また以つて誦すべきにあらずや。余は、銜味をもつて満ちたる我が詩壇に於いて、此の自然の調、率直の想、是れ殊に得やすからざるものなるを信じて疑はざる也。

阿房宮の輪奐壯麗なるよりも、余は、寧ろ籬邊一輪の海棠花が美を喜ぶ。作者が、此の著を世に示す所以、また茲に存せずや。余は詩人の聲に先んじて、此の書の廣く世に愛誦されんことを望まざる能はず。

謹んで、余は此の作者に對し、斯かる蕪辭をもつて、此の書の清らかなる卷頭を汚したる罪を謝す。

明治卅四年十一月

美育社の一室にて

黒田湖山

みづから詩集に序して

牧

童

天に聲あり、地に詩あり。  
人間ひとりうたなからむ。  
有情の動物宇宙を見、  
いかでか神をほめざらむ。  
熒々たる星は不言の言。  
青々たる草は不文の文。

花わらひを含み、鳥うたひ、  
自然は詩想を鼓舞すなり。

うたへよ、うたへ、やよ詩人。

人世もどよりうたふべく、

英雄まさに咏すべし。

四周の萬物みな詩題。

\*

\*

\*

\*

### 短笛長鞭目次

智慧と力

わが家

やよ雲雀

空しきほまれ

睡れる乳兒

薔薇一枝

千里の馬

蝸牛

既往追懐の歌

お正月

天馬山

我が戀

戀人におくる

戀家郷

ひこりね

富者をあはれむ

窓もる聲

我さ月  
わが友の眠りし時

螢狩  
罪

異郷の月  
断腸  
月

花染衣  
去年の今日

附  
録

船唄  
雲無心

巴山人  
湖山人

挿

畫

冲

舟

月中奏樂  
なきな

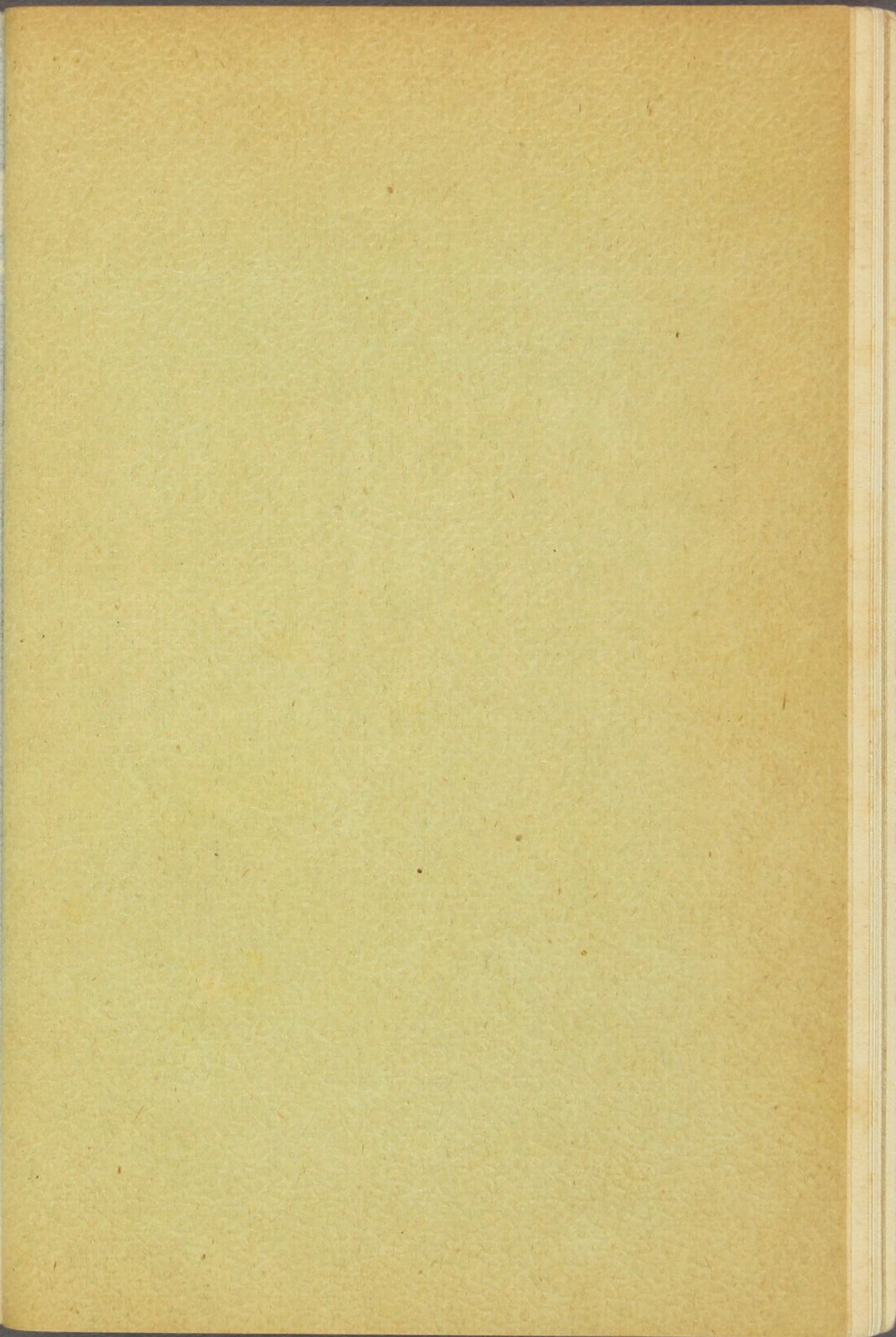
野狐  
異郷の月

彩箭

此の詩集を讀まむ人に

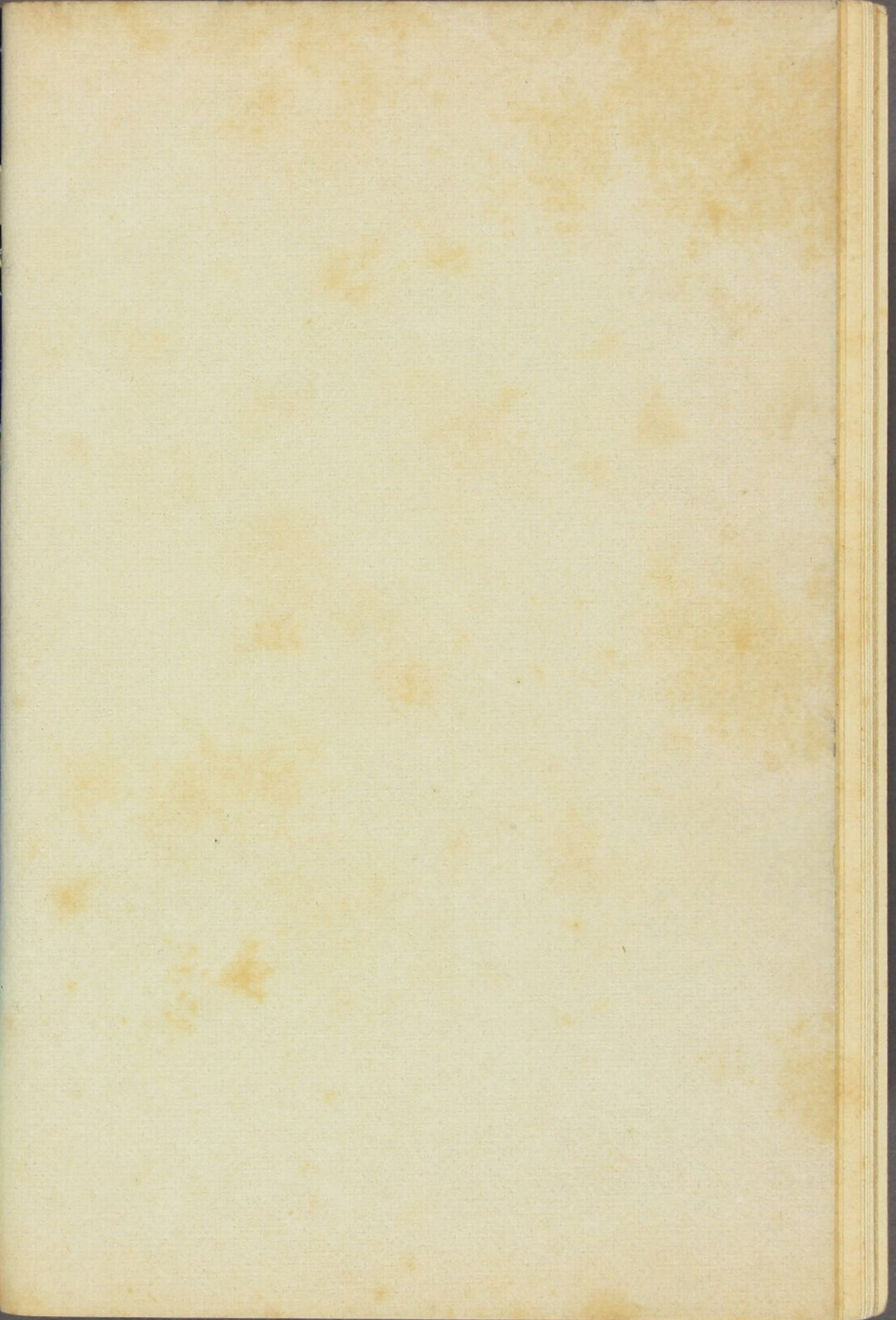
牧童

わが歌どもを見られむ人よ。  
かく改めて斯く言はざ、  
よからむ此處はあしかりなご、  
思ひつかれむふしあらば、  
教ゆるこさをな惜みたまひそ。  
われは野山の羊かひ、  
歌よむわざにつたなきをのこ、  
口にまかせてうたふのみ。





樂 奏 中 月



短

笛

長

鞭

牧

童

### 智慧と力

智慧に誇れる世の人よ。われらに語れ。  
 天の廣さと、深さは如何に。  
 金剛石を、大空に、散らせる如き、  
 星の數をば、なんぢ知れりや。

大なるかな、全能の、天なる御神。

神はすべてを、つくりたまへり。

神の御手は、かぎりなき力に富めり。

神よすべてを、能く知り給ふ。

力ありとて誇ることも、益なきわざぞ。

ひとのちからは、限りを超えず。

過ぐる日あしを、如何にして引とめ得べき。

月を西より、のぼせ得るか。

いと大なる、あまつ神、力のちから。

昨日も今日も、かはること無く、

ひをもて晝を照らしまし、月と星もて、

夜の闇を、あかくしたまふ。





わが家

裸体に生まれ、裸体にて、  
此の世をすつる世のならひ、  
山なす寶ありとても、  
玉の樓のありとても、  
人に残して世をぞ去る。

よしや百年生くるとも、  
限りなき世にくらぶれば、

あはれ瞬くひまぞかし。  
實によ此の世は旅なれや、  
天つ御國に至るべき。

是れをわが家とほこるとも、  
わがものならぬ旅人の、  
一夜をあかす假の宿、  
家なきものも家あるも、  
何かはあらむ何かせむ。

『なれが家は』と人間は、  
われは直ちに答へなむ、  
『わが住家ぞと呼び得べき、  
家はこの世にもたねども、  
「宇宙」は、われの家ぞかし。

蒼穹<sup>あほぞら</sup>は屋根、山は壁、  
日あり、月あり、星ありて、  
わが家を照らし花匂ふ、  
岡は「自然」の畫きたる、

わが家を飾る金屏風。

緑色濃き草の野は、  
錦のしとね、鳥うたふ  
林はわれの庭ぞかし。  
そらにかゝれる雲の額、  
日毎にかはるおもしろさ。

「天然」の泉、水きよく、  
川となりまた海となる、

東に西に、北みなみ、  
心のまゝに風に乗り、  
心のまゝにわれ行かむ。

わが行くところ皆清く、  
わが棲むところ皆たのし。  
玉の宮居も何かせむ。  
神のたまひし我が家に、  
心のまゝにわれ棲まむ。』

やよ雲雀

雲井たかく かげをかくし、  
うたふ汝は いづこ、何處、  
やよ、ひばり。

四方の景色 ほむるためか、  
きよき天に のぼるためか、  
やよ、ひばり。

いよ、高く のぼり行けば

山もみねも 下にや見らむ

やよ、ひばり。

されど下よ おろ なれがひなは、

首をのべて 巢にぞ待てる、

やよ、ひばり。



### 空しきほまれ

よくこそ言へれ吾が友よ、

さなり、衣は寒さをば、

凌ぐに足らばよかりなむ、

三たびの糧をかたじけな、

日々にうくるを得るならば、

これに増したる幸あらじ。

朽つる黄金に目のくれて、

鳥にも劣り、獸すら

爲さぬわざをも恥らはず、  
智恵あるらしくほこりがに、  
なしつゝ世をば渡り行く、  
人のさまこそあはれなれ。

しかはあれども友よ聽け、  
なべての慾に勝ち得たる、  
ますらをのこも勝ちがたき、  
敵は此の世をあらずなり。

悟れる人と呼ばれてし  
人すら是れになやまさる。

聲はなけれど人をよび、  
形体かたちなけれど迷はしむ。  
色は花とも櫻とも、  
人をあざむく味ひは、  
蜜より甘く、其のはえは、  
生命にまさるごとく見ゆ。

『空しきはまれ』得てしがな、  
われ得まほしと逐ひ行けば、  
たくみは深き山鳥の、  
長き尾引きて獵人を、  
いざなふ如く恐ろしき、  
陰府よみにみちびき入るゝなり。  
得とらでのぞみ絶つあれば、  
えたりとほこり狂ふあり。  
狂ふばかりに喜べど、

夢か影かや朝露か、  
しばしが程にかき消えて、  
空にひけるあざわらひ。  
空しきことはさはなれど、  
かゝる空しきわざどなき。  
書まろに記され碑に、  
ほられて名をば残すとも、  
「時」てふ浪のよせ來なば、  
あと無く洗ひ去られなむ。

天が下なる民草に、

己がほまれをのちまでも、

知らせまほしと思ふとも、

「年」てふ風の吹き來なば、

「代」といふ雲の蔽ひなば、

誰れか知るべき其の名をば。

神を畏れよ。人たるの、

道をば盡せ、わが友よ。

さらば朽つべき汝が名も、

「生命の書」に記されむ。

「ひなしきはまれ」迷ひ行きて、

サタンの蹄にかゝる勿れ。



## 寝れる乳兒

すやりく〜とつみなくも、  
ねむれる乳兒の顔見れば、  
けがれに染みし我が胸も、  
さよめられけり、おのづから。

乳をもとめて泣く外に、  
ここの葉も無き無垢の口、  
折りく〜動くさま見れば、

ほころびそめしぼらの花。

いどもかすかに動かせる、  
まぶたの下にかくれある、  
其の眼にうつる影や何？  
いとしき母の顔かとも。

いかに楽しき夢や見る。  
いちごの如き頬のへに、  
かろき笑顔ぞあらはるゝ。



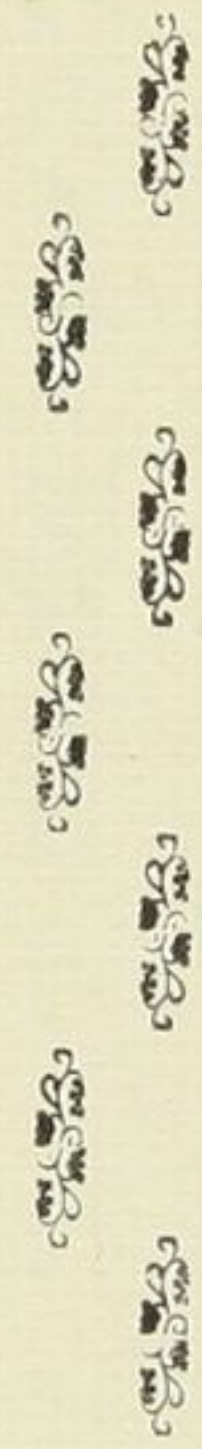
われも笑まばや、いざさもに。

神の御國にあるものは、

斯かるあどななものとかや。

雪より白き其の心。

われも得まほし其のこころ。



## 薔薇一技

月の夜をろに只だひとり、

心ともなくさまよへば、

たどる小みちの白露に、

衣の袖のぬるゝかな。

山寺の鐘かうくと、

更け行く空に冴えゆけば、

楽しみまだ盡きねども、

踵かへさむ、いざやいざ。

あな訝かしや何事ぞ、

松吹く風のそれならで、

いともかすかに琴の音の、

わが耳にこそ入り來なれ。

いかなる人のわざやらむ、

聞かまほしきは琴ならで、

琴の音よりもゆかしかる、

かなづる人の心にて。

琴に心をひかれつゝ、

草ふみわけて近づけば、

野中に一つ見もなれぬ、

家こそ見ゆれ月の下。

月の光にうかゞへば、

月の生みけむ玉かとも、

見まがふばかり美しや、

わかき乙女の花の顔。

うかゞふものゝ有りとしも、  
思ひしらでや一すぢに、  
十と三すぢの琴の糸、  
餘念もあらずはじくなり。

村雨さつと降りしきり、  
木の葉をはらふおもむきも、  
乙女の手より起るなり、

琴は生なきものなれど。

暫し手をとめにこやかに、  
乙女は頭もたげつゝ、  
空ゆく月をながめけり。  
月や見とれて落ちもせむ。

あゝ、此の乙女と彼の月と、  
何れかすぐれて美しき、  
まさり劣を知る神も、

あらば聞きたし其のさばき。

またもかなづる琴の音に、  
われを忘れてあはす笛、  
あゝ我が心、いかにせし  
わが身にかへれ、疾くかへれ。

乙女は琴の手をとめぬ。  
わが笛の音もまたたえぬ。  
草葉の虫もしづまりて、

誰ぞとあやしむ己がかげ。

乙女は庭に下りたちて、  
しづかに歩みわがたてる、  
柴の折戸に近よりて、  
外なるわれを見いだしぬ。

『あなゆかしやな笛のききみ  
心にくけれ、君は誰ぞ。』  
『あなゆかしやな琴のききみ、

心にくけれ、きみは誰ぞ。』

『今宵の月に明月の

曲をかなでむ、いざたまへ。

君もともく此の宵を、

吹きあかさされよ、いざたまへ。』

『妙なる琴の音にまよひ、

われを忘れて吹き出でぬ。

あな、恥かし、ゆるさせ給へかし。

つたなきわれを如何にせむ。』

去らむとするを走りより、

乙女はしかと捉へけり。

『さらばかたみ紀念にその笛を、

わらはにたまへ、その笛を。』

乙女は笛を奪ひ取り、

一枝の薔薇を興へけり。

『わらはも君に此の花を、

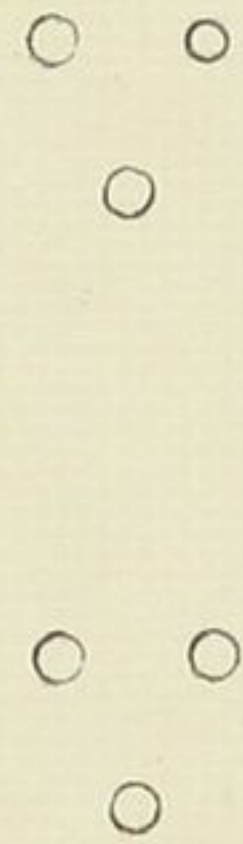
記念となして送らむ』と。

乙女は何處？かげもなし。

わが手の中に残れるは、

匂へる薔薇の一枝なり。

あゝ、乙女かや此の薔薇は！





野狐

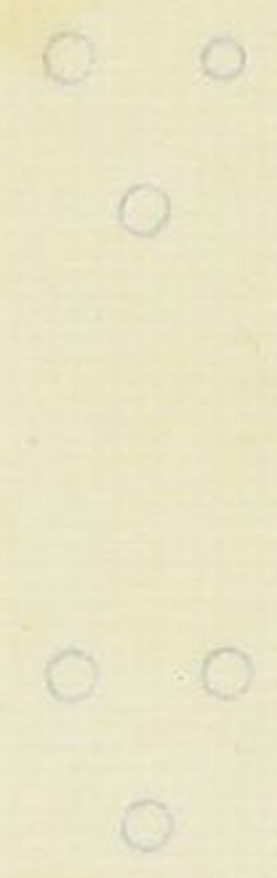
紀念となして送らむ」と。

乙女は何處？かげもなし。

わが手の中に残れるは、

匂へる薔薇の一枝なり。

わゝ、乙女かや此の薔薇は！



## 千里の馬

阿るものは時を得て、  
いまくしうも榮えゆき、  
諛ふものは時めきて、  
爵位をほこる世となりぬ。

臥龍を草廬に三度まで、  
禮して訪ひし漢土もろこしの、  
君にならへる君なきか、



おとなはるべき人なきか。

貴き黄金白銀も、

土より掘られ、香よき、

花も深山に咲くものを、

埋れし『大器』なからめや。

人に誇らず、世に媚びず、

さかえと力軽しみて、

只だ義たがしきを重んずる

誠實まことの人は野にかくる。

梅は闇にも匂ふなり。

徳ある人の隣りには、

おのづと民も穩に、

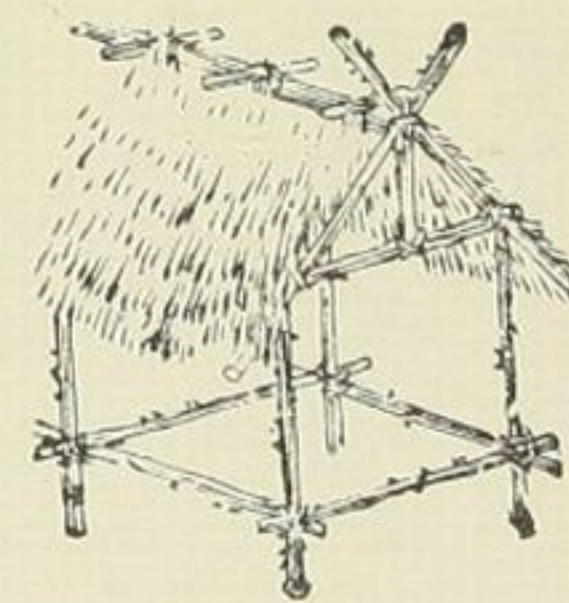
父と思ひて慕ふなり。

驥北の野には馬あれど、

伯樂なきを如何にせむ。

驚馬は錦の鞍おかれ、

千里の馬は野邊に飢ゆ。



蝸

牛

(押韻)

朝霧ふかき庭の面に、  
れりて歩めば折節に、  
桐の一葉の風なきに、  
はらりとばかり落ちにけり。  
落つる一葉をひえし手に、  
とめて静にながむれば、  
秋の哀をかたつぶり、

はの面にかゝむ果敢なさや、

『やがてぞ落つる桐の葉を、  
散らじと思ひなれが身を、  
任せたりけむ、あなおろか。  
こや、かたつぶり愚ぞや。』

『ちゑある人も「寶」てふ  
桐の一葉をたのますや。  
われを愚と君はよぶ。』

きみはわれにも増すおろか。』

『同じ葉の面を幾たびか、  
行きつもごりつ右ひだり、  
めぐりくゝて迷へるは、  
愚ならずや、かたつぶり。』

『暗より暗にまよひつゝ、  
慾の雲霧はらひ得ぬ、  
人は愚にあらざるか。』

われをおろかこのたまふな。』

『暫し』ととむる我か聲に、  
耳をもかさでしづくこと、  
己がいほりに引きこもり、  
よべとさそへぞ出ではこそ。

『われあやまてり、過てり、  
愚にあらずかたつぶり、  
なれは得がたきひじりなり。

われにさとりを興へたり。

名利の巷よそに見つ、  
心のまゝに此處かしこ、  
苔むす岩根たどりゆく、  
なれが旅寢のゆかしさよ。

疲れて憩ふ木の葉かけ、  
いかに樂しきものなるか、  
甘露に酔ふて眠る枝、

さぞやうれしきものならめ。』



### 既往追懐の歌

(押韻)

あゝ夢なるかまぼろしか、  
二十年あまり一年の  
月日空しく過ぎけりな。  
人の命は五十ぞと、  
定めありとか聞くからは、  
早や其の半近くこそ。  
かりの此の世に生れ來て、

母の乳房に育てられ、  
善よきも悪あしきも知らばこそ、

無垢の心に、ものみなを、  
樂し嬉しと思ひたる

わがいにしへは我れ知らず。

やうやくものを知りそめて、

口に思想おもひをのべはじめ、

家のほそりをかけめぐり、

父の膝にて聞くはなし、

いと面白くおもひしも、  
思ひ出せば影のごと。

學の庭に兄上と、

二人むつびて連れかよひ、

人に負けまじ劣らじと、

只だそれのみを苦痛いたみなき

心に思ひわづらひて、

くらせし日こそ慕はるれ。

小學卒へし後三年、

めざす方には風なくて、  
ながれ流るゝすて小舟、  
捨てられし身も撰ばれて、  
神の民とはなりにけり。  
思へばたふと主のめぐみ。

浪華の里にほゞ四年、

千辛萬苦と戦ひて、  
まなびの道を辿りしが、

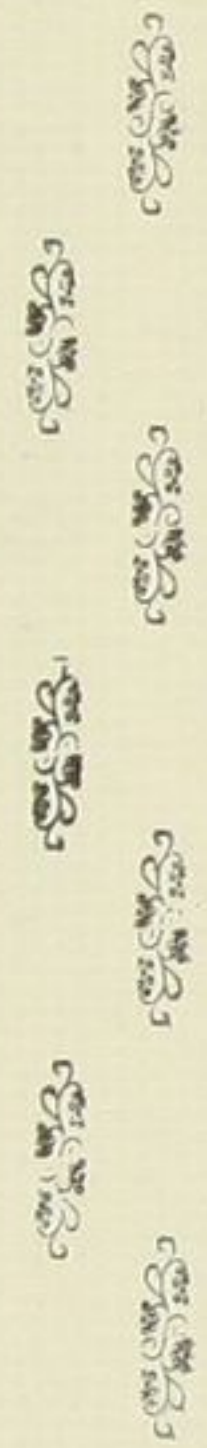
今年の夏の末つかた、  
おもふ所のあればとて  
東にこそ上りけれ。

問ふこと勿れ、人間は

『何れよりして出で來り、  
何れに行くべきものぞや』と。  
いふこと勿れ、『人間は  
土より出でし塵ほこり、  
墓場に終るものなり』と。

此の世は旅の世なりとて、  
空しく墓に打ち果つる、  
墓なき旅とな思ひなせそ。  
土より出でし肉と骨、  
よしや朽つとも、限りなく、  
靈魂天に生くべきぞ。  
ほろぶる爲めに墓に行く、  
ものにてあらば甲斐もなし。

日々にほろびに近くと、  
思はゞ心ほそからむ。  
されども謝せむ、わが神に  
天つ繼嗣よつぎとせられしを。





お正月

(押韻)

去年とは言へど昨日なり。

しかも昨日の夕なり。

なかよき二人の姉弟は、

ともにふしどに入りけるが、

姉は弟にさゝやきて、

『武坊ほんとにうれしいね。

明日はいよくお正月、

嬉しいだらう、ねえ武坊。』

武雄はしばし考へつ、

『姉様、時何です、何時が明日、

坊は大すきお正月。

明日は何時来る八重姉様。』

『武坊お前は知らないの。

今ねんねしておきくを、

したらば、それが明日の朝、

お正月だよ。羽子<sup>はね</sup>つこか。』

『姉様<sup>チヤン</sup>、坊は男兒<sup>をとこ</sup>だよ。

羽子<sup>チュ</sup>をつかずにホラ風を、  
ウ、く坊は風あげる。

嬉<sup>チユ</sup>しかつたよクリスマス<sup>チユ</sup>。』

『ほんとに坊は男の兒、

こないだ貰つたあの風を、  
揚げてお遊び、姉ちゃんは、

羽子と手鞠を、ねー坊や。』

武雄はいつしかねむり居ぬ。

八重子も样なくねむりけり。

二人はねむれり、いとやすく。

二人は如何なる夢を見る。

見よや、ねむれる此の二人、

やさしき臉かろく閉ぢ、

頬にはゑくぼをたゝえたり。

天の使が此の二人。

初鶏うたひぬ。夜は明けぬ。

軒の雀は窓ちかく、

來りて二人を呼びさまし、

初日まばゆく輝けり。

やがて武雄は起き出でつ、

『坊はえらいよ八重姉様。』

今朝は早いよ、ホラ坊が。

姉様チヤン、今が明日チユですか。』

八重子は眼をばすりながら、

『武坊大層お早いな。』

今は明日ではないけれど、

お正月だよ、來ましたよ。』

母は二人の名を呼びつ、

『さあ〜、愈よお正月。』

お雑煮祝うてお遊びよ。

武雄は今日から五つだよ。』

『アラ嬉しいね、お正月チヨツガチユ。』

姉様チヤン、坊の年幾歳トチイクチユ？

當て、御覽よ。もう今に

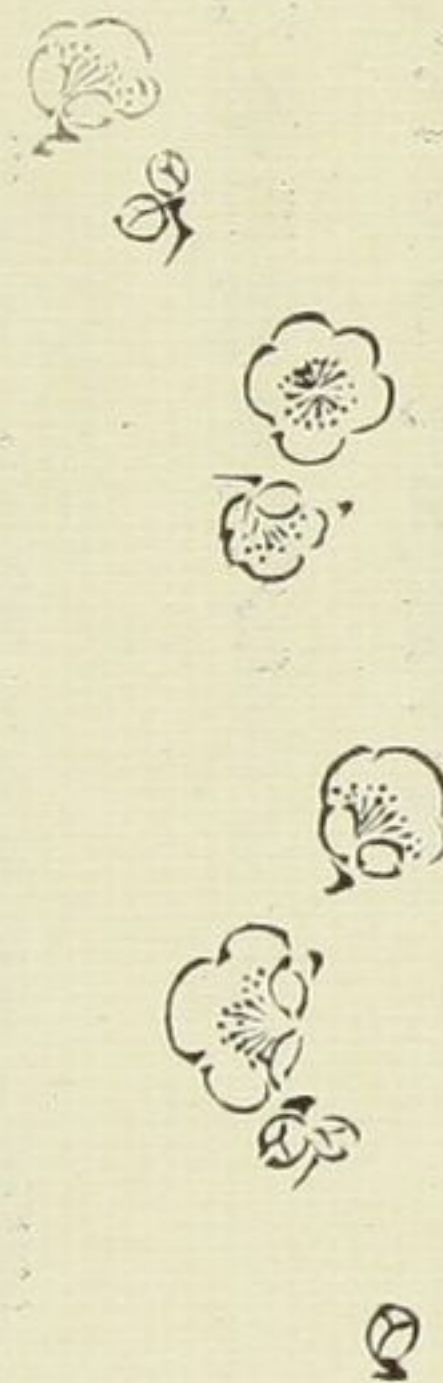
八重姉様チヤンと同年齡オナイドチ。

母様カアチヤンお雜煮いらないよ。

早く出チしてよ、あの風を、

揚げて遊チばう。坊の風、

天道様テントウチヤンまであがらうよ。』



# 天馬山

天馬山は韓國釜山浦日本居留地の西方、寓房洞の後に聳り、釜山灣内の絶影島と相對す

天馬の峯に朝まだきのぼりてはるか見渡せば、  
絶影島のその東、  
日本海のそのあなた、  
水と天空との間より  
のぼる朝日の勇ましや。

琥珀の色にかやける  
海の面に波もなく、  
涼しき風を帆にふくむ、  
船は三つ四つ五つ六つ  
あれく其處にうす黒く  
緑の山の對馬見ゆ。

熊襲たすけし韓<sup>から</sup>るびす、  
討たせ給ひしいさほしを、

記すはたゞに書のみか、  
御船わたせし灘の水、  
御足ふれにし此の國土は  
ともに昔時を語るなり。

志賀の浦人却かし、  
鷹の島邊をあさりつゝ、  
分をば知らぬ蒙古勢、  
大和櫻を散らさむと、  
寄せは來ぬれど日の本の、

神風つよく吹きつのもり、  
ますらをのこの切先に、  
生命は露とうち消され、  
怨は深き玄海の  
底の藻屑となり果てし、  
魂魄今もをりくゝに、  
波の上はや狂ふらむ。  
六十餘州せましとて、

鷄林八道切りまくり、  
明を降せの武威すごく、  
先を争ふ兩將が、  
軍率ゐて上りたる  
ほまれは高き釜山鎮。

關八州の野を馳せて、  
異國の月に嘶きし  
駿馬の聲は韓人の、  
靈魂を奪ひて今もなほ、

いぶせき小屋の民草の、  
夢に聞えてをぢらるれ。

隣交やがて整ひつ、  
使船の往來數しげく、  
一時榮華を極めぬる、  
\* 舊館は今や衰へて、  
草梁村の新和館、  
韓國一の日本港。



前には抱く良港灣、  
後には負ふ伏兵山、  
釜山の城趾左にし  
富民洞を右手に見て、  
龍頭、龍尾の兩丘に、  
緑は深き松の色。

※ 舊館は舊日本人居留地にして今の居留地と釜山鎮との間にあり

※ 龍頭、龍尾の兩丘は居留地内にあり。





前には抱く良港灣、  
後には負ふ伏兵山、  
釜山の城趾左にし  
富民洞を右手に見て、  
龍頭、龍尾の兩丘に、  
綠は深き松の色。

※ 舊館は舊日本人居留地にして今の居留地と釜山鎮との間にあり

※ 龍頭、龍尾の兩丘は居留地内にあり。

残  
が  
戀

さ  
ち  
子

たゞひともとの撫子に、  
浮世の風やあたらなむ、  
あはれいとしき此の花に、  
無情の雨やそぐらむ、  
心おかるゝ汝なれば、  
松の一本うつし植ゑ、  
淋しき時の友にとて、

迎へたまひしいさむ君。

同じ垣根にへだてなく、  
すみれつむなる兄弟<sup>はらから</sup>を、  
見るにつけてもかしの實の、  
ひこり淋しと思ひしを、  
厚き情の父母<sup>たらちね</sup>が、  
許し給ひしわにうへの、  
やさしき心うれしくて、  
明くれ慕ひまつりしが。

三五の月の秋すぎて

二八の花の春霞、

かゝるべしとは思ひきや、  
兄とよびてしその人の、  
心の駒や狂ひけむ、  
はらからなる身も打ちわすれ、  
父にせまりぬ、母にまた  
妾をつまに許してと。

闇をつねなる親ごゝろ、

子ゆゑに道も迷ふとか、  
うつろひやすき月草の、  
露をまことの玉と見て、  
結ぶもあはれさゝら萩、  
あしき縁のいひなづけ、  
たよる方なきかなし子が、  
心のかせと知らずして、  
手かせ足かせいとはねど、  
心のかせの苦しきよ。

思ふに添はで思はぬに、  
なびくはつらき女郎花、  
はなのかんばせうなたれて、  
浮世の秋をいごふさま、  
そも誰れ故と人ごは、  
かの君ゆゑと答へなむ。  
心つくしのたらちねの、  
さだめ給ひしいひなづけ、  
厭ふといふにあらねども、

思へばつらし浪花津の、  
よしあししけぞが中に、  
ゆかして見てし彼の君を、  
おぼつかなくもおもひすて、  
おもはぬ人にそへよとは。

千々に流るゝ山川も、  
流れ逢ふ瀬のなくてやは、  
人目しのぶの浦にさへ、  
そこに、みるめは生ふものを、

などで妾は世の中の  
ためしにもれて斯くばかり、  
かなはぬ戀に沈むらむ、  
心かよはずつても無う。

あはれ彼の君ゐまさずば。  
あはれ我が身のなかりせば。  
彼の君なくば我れなくば、  
かばかり闇に迷はじを、  
かばかり物は思はじを、

かくまでわれは慕へども、  
親のちぎりしいひなづけ、  
背き難きをいかにせむ。

嵐に散りし山ざくら、  
雲にかくれし夜半の月、  
世はなれのみ浮世かは、  
あな我が胸の苦しさよ。  
おもひつめては乙女氣の、  
はりさくばかり胸ふるふ。

味さなき世に今はしも、  
望のつなは絶えはてつ。

かゝる佗しき浮世には、  
いきながらへて何かせむ。  
いでこそ死出の山路にと、  
おもひたちたる旅衣、  
さして行くては定めても、  
親子のきづな断ちかねて、  
三筋の道に一すじの、

こゝろ迷はす外どなき。

戀しき君は今いづこ、

東の都に業を卒へ、

雞の林につかさぞと、

風のたよりに聞きしかど、

雲井の雁の玉章も、

見れば思のますかゝみ、

くもらせまじき心より、

ことさら問はず其の日頃。

世をも人をもいな舟の、

いなにはあらぬ最上川、

うかひかねたるあはれ身を、

ならば霞の奥ふかく、

こゝろ安けき一人すみ

夜さむの床の寝ざめには、

ゆかしき君の面影を、

せめて涙の友とせむ。

父に願ひぬ母にまた

人のこゝろのいとはしく、  
浪花の浦もつらければ、  
たけなる黒髪きり捨て、  
花のころもでぬぎかへて、  
浮世の人にけがされず、  
汚れし人に近よらで、  
獨りすむべき身たらんと。

人の聞くさへ悲しきを、  
親といふ名のいかならむ、

さかりの花を見んがため、  
おふし立てし汝なるぞ、  
厭ふとならば彼の人を、  
捨てゝもわれは厭はじな。  
出でゝも行けや浪花津を、  
住むべき里の多ければ。

親のなさけのありがたや、  
さらばと着つる旅ごも、  
浪花の浦に住みなれて、



流石名残は惜しけれど、  
よるべ渚のすて小舟、  
たよる綱手は朽ち果て、  
今はとばかり流れ行く、  
うき身の果と人や知る。

あな面白の草のいは、  
吹くやお笛のあはれにも、  
ひくやつま琴しづかにも、  
君とわらはとうち解けて、

こゝろ合はする糸竹の、  
しらべ楽しき此の夕、  
村雨さつとはせを葉に、  
そゝぐと見れば夢さめぬ。

黒き煙は空に満ち、  
凧笛はわかれ告げわたる。  
あはれ此の身は只だひとり、  
君が面かけ消えたれど、  
見しやさち夢まことにて、

仇にふむべき武藏野も、  
花咲く春のあるならば、  
いかにうれしきことやらむ。

君と相見ん行末の、  
はかなき夢のたのしみは、  
澄ませし胸のおもひ川、  
またもや濁すはじめにて、  
かゝるもうしや戀のはし、  
寄せてはかへる年浪の、

音をば如何に聞きてまし、  
乾かぬ神のあるものを、  
誰が秋風の身にしみて、  
ひまなく物やおもふらむ、  
あはれ千里を照らすてふ、  
もなかの月にこゝろなく、  
あはれ玉章懸くときく  
雲井の雁も名のみにて、  
幾よの閨のわびしさに、

しめり果てたる枕かな。

神ならぬ身のおろかさに、  
人の心を汲みかねて、  
みづから迂る荒いその、  
浪にもまるゝわれなれど、  
もしやと頼む彼の君の、  
逢瀬のほごをゆめみつゝ、  
かなしき秋を過ごしけり、  
淋しき冬を暮らしけり。

捨てし此の身は春くれど、  
花見む友もあらなくに、  
浮世にもれし茅が家は、  
訪ふべき人のなきものを、  
あないぶかしの聲やなど、  
たち出で見れば此は如何に、  
君はさましぬわが胸の  
とどろくばかりうれしくも。  
君ゆゑかゝるうき身ぞと、

年ごろ日ごろひそめてし、  
そこの思をうちあけて、  
せめて一言あはれてふ、  
やさしき言葉たまひなば、  
いかにうれしきことやらむ、  
こゝろあせれど恥らひの、  
そゝろためらふわれも乙女よ。

しのぶが岡のほとゝぎす、  
初音もらさで過ぎにしが、

思ひがけなやわれゆゑに、  
おなじ歎とさく川の  
末のくさ川すゑつひに、  
かれむ宿世と思ひしに、  
つげざる君のなさけなく、  
知らざるわれもうらめしや。

うはの空なる風さへも、  
松にはかよふならひとや、  
高く澄み行く月かげも、

浮世の露をてらすとか。  
たのみし夢のまことにて、  
契りしことの仇ならで、  
かたみにかはす戀衣、  
いざやきてまし諸ともに。

こゝろの雲や晴れにけむ、  
眞如の月の影きよく、  
胸の霞や消えにけむ、  
思のいづみ澄みかへり、

妻とよはれつ夫つまと呼び、  
いざ棹さゝむ世の海に、  
よしや浪風あらくとも、  
愛とまことをつなでにて、

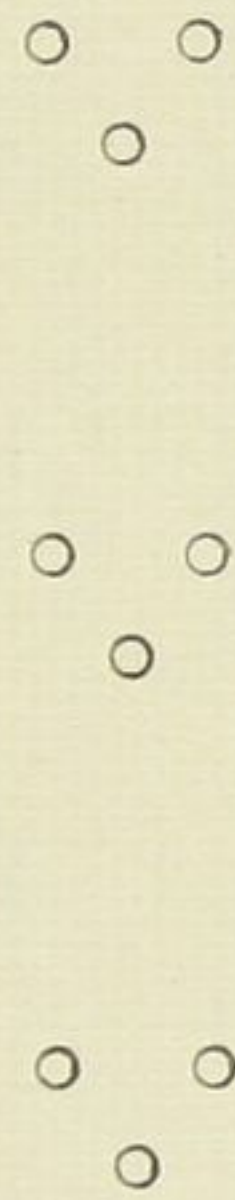


戀人におくる

海山遠くへだゝりて、  
互に顔を見むすべも、  
たえて無けれど夜晝に、  
さみを思はぬひまも無し。  
机ふみによりて書よめば、  
心はわれをぬけ出で、  
君のはとりに飛びぞ行く、

身は尙ほ此處にありながら。

ねむれば君を夢に見る、  
二人うちつれ月の夜に、  
みどりの草の露わけて、  
うれしく歩む其の様を。



戀 家 郷

夫と呼ばれつ妻とよび、  
いざ棹さゝむ世の海に、  
よしや浪風あらくとも、  
愛とまことを綱手にて、  
かはり給ふな變らじと、  
神の御前に誓ひてし、  
妹背のちぎり千代かけて、  
みどりの松の色かへじ。

かたみにかはす手まくらに、  
盡さぬ寝ざめの睦言を、  
語り明かしたつ短夜を、  
かこちたりける昨日今日、  
國の爲めとは言ひながら、  
いとしの妻を残したつ、  
海山遠き異邦に、  
旅衣さる悲しさよ。

名残はいとゞ惜しけれど、  
わかれはいとゞつらけれど、  
かへり來ん日を樂みに、  
残さるゝ身と残す身と、  
互に手と手にぎり合ひ、  
無事に居たまへ歸りてと、  
つがひし言葉短くも、  
思ひは長き血の涙。

船は煙を吐き初めぬ。

時は來りぬ、別るべき。  
影見えぬまで見かへりて、  
惜しき別れの悲しさは、  
海より深く、苦しさは  
身を八裂にさるゝより、  
一しはつらき思ひにて、  
はや眼もかすむ山と水。  
いとしの妻にうち別れ、  
年ごろ日頃住みなれし、



我が日の本をあとにして、  
沖に々々と去り行けば、  
見わたす限り水漂渺、  
蒼海原の波たかく、  
悲しむわれを嘲むごと、  
船ばたうちて過ぐるのみ。

澄みかへりたる月かげも、  
四方にきらめく星さへも、  
我が悲しみを増すばかり、

夢は飛び行く家郷の天、  
千里の孤客友もなく、  
妻戀ひて鳴く秋の夜の、  
牡鹿ならねどわれもまた、  
月にこそ啼け妻戀ひて。

泣きぬ叫びぬ、煩ひぬ。  
されども、われを慰むる、  
やさしき言葉露もあらず。  
せめて面影、相みんと、

彼のうつし書を手に取れば、  
實にさながらよ、さりながら  
情かよはぬ紙の片きれ。

布哇の島に船つけば、  
わが故郷とよろこびて、  
雀躍すあり。友來ぬと、  
いとうれしげに迎ふあり。  
また逢ふためと別るれど、  
別れはいつも悲しくて、

別るゝもとゝ知りながら、  
逢ふはうれしき人の常。

再び船は灘こえて、  
晴れわたりたる朝まだき、  
青く霞める『金門』を、  
やがてくゞりつ音に聞く、  
港に碇おろしけり。  
戀しき人に見えんと、  
喜ぶものゝ多かるに、

われやわびしく只だ孤獨。

山はあれども、わが身をば、  
迎ふる故國の山ならず。  
人はあれども、わが身をば、  
迎ふる愛の友ならず。

『金門園』の花の色、

『絶壁亭』の月の影、

歌うたへるは、誰が子ぞや。

笑みかはせるは、誰が子ぞや。

淋しさ長き汽車の旅、

やがて目ざせし墨西哥の、

『ブエナ、キスタ』に着きぬれど、

右も左も知るべなき、

身は天外の一孤客。

いと睦まじう語りつれ、

うちつれ行ける人みては、

思ひのまさる我がこゝろ。

喜びあるも分つべき、  
いとしの妻は遠くして、  
悲みあるも慰むる、  
友しなければ故郷の、  
空のみ常にこがれつゝ、  
興なき『時』のいと長う、  
空しう欠けて行く月よ、  
わが胸滿つる日もあらずして。

○金門はGolden Gateの意譯

●金門園は桑港のGolden Gate Park

◎絶壁亭はCliff houseの意譯

### ひこりね

さ  
ち  
子

うれしき夢は冷えはてゝ、  
うつゝにかへる草の床、  
おくや思の露しげく、  
浮くばかりなる手枕に、  
ありし昔べしのぶれば、  
月のかつらをそれと見て、  
手折らまほしき一念に、  
泣きくらしたる幾秋ぞ。

家も財もうちすて、  
戀ひわたりたる心根は、  
物のあやめもことわりも、  
わかぬばかりに狂ひしを、  
つれなき人はあざけりつ、  
迷ひたりとて誹れども、  
情を知らぬ世の人は、  
おろかなりとて笑ひしが。

あつく正しきわが戀は、  
清くけがれぬわが戀は、  
闇路を照らす大神の、  
みいづの中につゝまれて、  
うれしく成りし其のねがひ、  
深き契は千代までも。  
宵の春雨晴れゝゝて、  
希望のぞみに匂ふ月の色。  
かたみにかわす新まくら、

嬉しさ被ふはぢらひの、  
はぢらひつゝもうれしさの  
盡きぬ睦言ゆめならず、  
語り明かしつ夜もすがら、  
世に蓬萊の山あらば、  
死なぬ薬をもとめ来て  
千代も榮えむとはがりに。  
夫がなさけのふところに、  
まごろむ程は塵の世の、

富もたからも忘られて、  
譽をねがふ心なく、  
そしりを厭ふこともなし。  
たゝに祈るは長かれと、  
結ぶ契りの常陸帯、  
ゆく／＼かけて解けざるを。  
匂ふ霞をうちのせて、  
花に飛びかふ双蝶の、  
かはすも軽きその翼、

天津乙女が羽衣の、  
舞ふもかくやと思ふまで、  
浮世の人に羨まれ、  
君はたのしとうたひしを、  
われは嬉しと聞きにしを。

うれしき春は疾く過ぎて、  
樂しき夏もくれはて、  
秋立ちぬれば此は如何に、  
いとしの夫はさみのため、

國の爲めとの冠して、  
あはれのを残しつ、  
海山遠き外くに、  
たつべうなりし旅衣。

かゝるべしとはかねてより、  
思ひ知れどもはかれども、  
なほ今更に悲しくて、  
散りこそかゝれ憂き涙。  
なみだに若しや色あらば、

赤き心は此の袖に、  
深きなげきは此の袖に、  
見ゆるもの、あな悲し。

夫のうちふる其の帽よ、  
妾の振れるハンカチフ、  
無言のうちに千よろづの、  
離別の文字をよむ程に、  
時は來にけり、別るべき。  
船は離れぬ右ひだり、

一筋のこす黒煙、

うらみを引きていと長く。

船のうちなるあはれ夫、  
君にわかれてすごくと、  
空しき宿に歸り行く  
妻が心を知りますよ。  
花の都と、さは言へど  
人の皮きる狼は、  
ちまたに黒くつごはずや、



甘き血しほを吸はんとて。

愛のとりではかたくとも、

夫よ守らせ給はずば、

こゝろ狂へるけだものゝ、

するどき牙につかるべく、

世のいつはりを容れむには、

流石にせまき我がむねの、

千々に亂るゝ悲みは、

いつ溢れんも、はかられじ。

あはれ濁れる世の中の、

人の心は氷より、

なほ冷に凍り果てつ、

慾に閉ざせる眼には、

清き涙やかれにけむ。

たゞ一すぢの眞より

夫戀ふわれを指さして、

女々しとこそは笑ふなれ。

君を見るめもあら磯に、  
寄せてはかへる波まくら、  
いくよ悲しきひとり寝の、  
夢おどろかす濱千鳥、  
なくね身にしむ此の頃は、  
涙の汐にぬれくゝて、  
かはく間もなき海士衣、  
たもとの色ぞかはりたる。  
いざや我が背のうつしえよ、

鳴るは休めの鐘なるを、  
疾くく給へ我が閨に、  
このやはらかきかひなをば、  
枕となして温き、  
血汐に近く添へよかし、  
蘭燈にはふ此の居間は、  
われら二人の王國なるを。  
言へど答ふる口なしの、  
花ならなくにうつしえは、

耳なし山の呼子鳥、  
山彦だにもいらへせず、  
え堪へであつき唇に、  
キスはすれども、わが胸に、  
抱きはしむれど恨めしや、  
つめたき紙のふるゝのみ。  
思あまりて水くさの、  
跡をし見ればわが夫の、  
深き情は筑紫がた、

千尋の底も及ばしな、  
さは言へわれもわが愛も、  
いかでか君に劣るべき、  
人しらぬ夜のこのふすま、  
誰がため斯くは濡るものぞ。  
君は妾の命なり。  
妾はさみの命なり。  
をじかの角の束の間も、  
逢はで過くべき身ならねど、



只だ一時の夢の間も、  
わかれて住むはつらけれど  
やがて逢はむを樂みて、  
淋しき閨に寢つ起きつ。



おきんか

只だ一時の夢の醒も  
わかれて住むはつらけれど  
やがて逢はむを樂みて、  
淋しき闇に寝つ起きつ。

富者をあはれむ

満つれば欠くるは月のみならず、  
開けば落つるは花のみならず。

此の世の榮えもみちなば欠けむ。  
此の世のたからも開かば散らむ。

もち物多きもほこるに足らず。  
山なす黄金ものぞむに足らず。  
盗人うがたむ歎くはおろか。

朽ちなむやけなむ、かこつはおろか。

貧しきたみらは、富む外ぞなき。

とみたるやからは、おとろふばかり。

貧しきたみらは、安けくねむる。

とみたるやからは、ねどこにうれふ。

朝の露よりもろきはいのち、

此の世を去るとき、ほご遠からじ。

たくはへおきたる、たからもあはれ。

たからにたのめる、やからもあはれ。



残 月

下よりわれは呼ばひけり。

『なれを尋ねて、はるけくも、

すまゐを出でつ、此の橋の、

上まで辿り來りしを、

なれは何とてつれなきぞ。

雲間に姿おしかくし、

われに心をとめもせず。

なれを慕へるわが胸の、

まことのたけの足らぬにや。

下界のさまのけがれしを、

いとひて汝はかくれしか。

此の世は實にも、汚れたり。

人の心は腐ちてあり。

さはれ、この野もあの山も、

うるはしからむ、群れる、

雲をひらきていと清き

なれが光をもらしなば。



上より月はこたへけり。

なさけ深かるみことばを、

あだにや思ひはべるべき。

すげなきものとのたまふな、

わらはも君を見まほしや、

橋をくゞりて流れ行く、

水の鏡にみをうつし、

草葉木の葉に置く露の、

玉に姿をやどしつゝ、

金剛石や白銀と、

人にうたはれ、うなるこゑに

あれ螢よと呼ばれつゝ、

相もろともになぐさめて、

照らし見まほし照らさなむ、

心はあれど悲しやな、

雲てふものにへだてられ、

君に逢はなむ術ぞなき。

\*

\*

\*

\*

わが友の眠りし時

君に別れつさびしくも、  
東の空に旅ごろも、  
きてまだ月はやうやくに、  
一たびまろく見えしのみ。  
のちをば知らぬ人の身の、  
あれを此の世の別れぞと、  
いかで思はむ、思ひきや、

今日のおとづれ聞かんとは。

君をはなれてたび立ちし  
我が身を後にのこしつゝ、  
早くも君は天の國、  
神のみそばに急げるよ。  
すこやかなるも稚きも、  
さだめの時の來たりなば、  
神にめさるゝものなれど、

人は知らじな何時ぞとは。

定めある世もさだめなき、  
世にこそ見ゆれ人目には。  
よはひ三十路に足らざるを、  
君がねむりは寤めざるよ。

わが手を堅く握りつゝ、  
またも逢はむと誓ひてし、  
君の言葉は今もなほ、

耳に残れり、あらはにも。

きみの面影ありくゝと、  
瞳に入れど君まさず。  
きみは此の世にゐまさねど、  
たのしき國にゐますらむ。

また來む夏は浪華津に、  
ゆかんもわれはたのしまじ。  
君の姿の見えざれば、

君のことばの聞えねば。

君のなきがらをさめたる、  
ほとりに獨りさまよはむ、  
手むけの花をさげつ、  
ひかしの君を思ひつ。

天なる父のふところに、  
眠れる君をおもひつ、  
一夜の夢のさむるとき、

またも逢はむと思ひつ。

## 窓もる聲

樵夫すむなる山里も、  
十字かたどる街衢にも、  
綿とも見ゆる白雪の、  
いと寒くこそ積りけれ。  
すごきはかりの月冴えて、  
雪のはれ間に輝けば、  
見渡すかぎり家も木も、

しろがね着たる如くなり。  
吹き来る風のをりくに、  
きこゆる聲は何やらむ。  
聲をしるべに来て見れば、  
窓もる光、眼をぞ射る。  
更け行く宵をよそにして、  
ねむりもやらず、如何なれば、  
手もて額をさへつゝ、

たゞひたすらにかこつらむ。

『月日の照らすその様も、

雨雪の降る様見るも、

かたよる所さらに無く、

誰もひとしく恵まるゝ。

さるを、此の世は如何なれば、

かたよる事の多きぞや。

富みたる人は美味にあき、

いと華ややかに着飾れり。

細き烟も立てかねつ、

身にはつゝれをうち纏ひ、

夙に起き出て晩く寝ぬ、

苦勞するもの多かるに。

賤が伏屋を下に見て、

高く聳ゆる高樓に、

朝な夕なに音楽の、

響さわたるを何と聞く。

寒き夕も暑き日も、

休らふいとまなくくくに、

貧苦に追はれ追はれつゝ、

働くものゝ多かるに。

黄金しろがね山のごと

もてる人の子羨まし、

「不自由」てふ字を知らずして、

學びの庭もいと易う、

卒へてはまれの稱うけ、

むれよる人に敬はれ、

榮華の雲に包まれて、

誇り散らせる様見れば。

天道是乎非乎、疑はし。

幼かりける其の日より、

われは學びに志し、

家の貧しき其が爲に、

學びの庭に入ること、

叶はぬまゝに古の、

ひじりにならひ夏の夜は、

螢の光、冬の夜は、

窓の雪をばたよりつゝ、

數へつくせぬ艱難と、

戦ひながら學べども、

あゝ、如何にせむ如何にせむ。

黄金てふものなき爲めに、

あたら志望はありながら、

翼とられし鳥のごと

なくより外に術もあらじよ』

胸はふさがり聲うるみ、

涙は頬につたひつゝ、

いともあはれにしく／＼と。



忍び泣きにぞ泣きにける。

『雪におされしなよ竹も、  
忍びて待てば朝日照り、  
かゝやさわたる其の時に、  
立ち得ることを思はずや。』

やよや青年起てや起て、

「艱難汝を玉にす」と、  
教へられしを忘れしか。

金もて買へる學問は、

死したる豕の遺骸のみ。

「學士」「博士」とはこるこも、

何等の益のあるべきぞ。

されども汝が千万の、

艱苦を嘗めて鍛ひたる  
學びの道ぞるつぼにて、  
きよめし無垢の黄金なる。

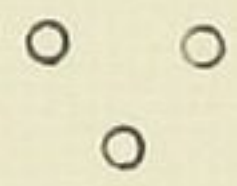
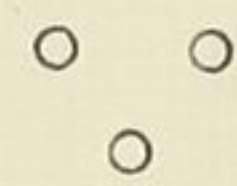
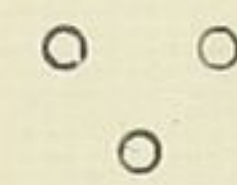
やよ勉めよ』と勵ませば、

うやくしくも跪き、

天を仰いで感謝しぬ。

胸は希望に満たされつ、

膝に涙を落しつゝ。



## 螢狩

高く飛べるは、星とも見ゆれ。

草にやとるは、玉とも見ゆれ。

さゝら小かほに、すがたをうつし、

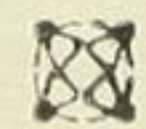
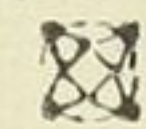
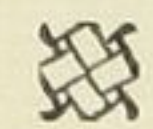
あなたこなたに、逃げ行くをかし。

先をあらそひ、とらゆるさまの、

数をあらそひ、ほこれるさまの、

いかにたのしき、ほたるの狩は。

いかにうれしき、夏のあそびは。



## 罪

あさましや！

天なる神の御像を、

うけて生れし身ながらも、

「慾」てふものに誘はれ、

悪魔の罠にかけられて、

土の上這ふ虫だにも、

劣りしものとなり果てぬ。

おそろしや！

人は知らじと思へども、

神はいまさぬ所なく、

壁に耳ある世のならひ、

かくせし罪はあらはれて、

さばきの庭にひき出され、

やがて牢獄の暗に入りぬ。

うらめしや！

世の人々に指され、

みうちにさへも捨てられて、  
妻子は路頭に迷ふらむ、  
悔みて及ばぬことながら  
人のふむべき其の正道を、  
はづせし報今ぞ知る。

はづかしや！

鐵の窓より眼をとめて、

黄金あざむく蝶々の、

廣き野原を樂しげに、

飛びて遊べる見るにつけ、  
思ふよ罪し犯さずば、

「自由」はわれにあらむにと。

ねたましや！

位高かるかの人ば、

われにも増して罪ふかき、

ものにしあれど網の目も

巧にぬけて羽風さる

其の様見ればねたまし、

欺きやすき人の世よ。

聞くべしや！

ひじりの教、百千たび

聞くとも何の甲斐あらむ。

世をすねものゝ己が身を、

けだかく見せむ方便とて、

説ける語を教なる。

「慾」ゆへ人は生くものを。

あるべしや！

神てふものゝあるべしや。

神の審判のあるべしや。

仁者は滅び、しひたぐる

鬼は此の世に榮ゆるを、

義士は斃れて奸臣は、

榮華の夢に飽くものを。

くゆべしや！

一たび罪に落ちし身の

悔ゆとも今はすべなきを。

山ほど徳を積みばとて、

わが罪いかですゝがれむ。

罪の値の死なりせば、

わが靈魂は滅ぶのみ。

生くべしや！

われは罪ゆへ死ぬものを。

まさごの罪に死なんより、

重けき罪に死にてこそ

死にかひもあれ、ベルゼブル！  
汝はわが神、われは汝が  
忠なる僕、悪魔の子！

おもしろや！

まことの道は行きがたく、  
善きことなすは苦しきに、  
心の駒に鞭うちて、  
悪魔と共に働けば、  
蜜より甘き人の血は、

渴けるわれをうるほせり。

思ひきや！

此の世の王は神ならで、  
悪魔の力いと強く、  
その兵士の荒るゝとは、  
さても愚かよ世の人は、  
悪魔を王と知らずして、  
弱きエホバに事ふとは！

いぶかしや！

あな訝かしや誰れなれば、  
悪にさゝげしわが身をば、  
善にかへれと汝は呼ぶよ。  
あな、くるしやな「本心」は、  
行かじとあせる身を捕へ、  
善にかへれと強ふるなり。

おどましや！

われは悪魔に全身と

全霊すべて献げしに、  
われの心は、なご弱き、  
聞かじとすれど「本心」は、  
悪魔を捨て、正しきに、  
かへれと尙も強るなり。

はかなしや！

悪魔も今は頼みなし。  
強しと見えて強からぬ、  
汝は虚勢を張りけるよ。



夢は破れぬ、われ覺めぬ。  
くしき力は「本心」の、  
われをいさむる誠なり。

なつかしや！

路頭に迷ふわが妻子、  
いかに今日の日すこすらむ。  
子ゆへに迷ふわが心、  
罪しあらずは天にます、  
神もあはれと見たまはむ。



夢は破れぬ、われ覺ゆぬ。  
くしき力は「本心」の、  
われをわさむる誠なり。  
なつかしや！  
路頭に迷ふわが妻子、  
いかに今日の日すこすらむ。  
子ゆへに迷ふわが心、  
罪しあらずは天にます、  
神もあはれと見たまはむ。

あゝ、わが罪を如何にせむ。

たうとしや！

神のみ子なる基督は、

罪あるわれを救はむと、

十字の上に「愛」と「義」の、

血潮を流し給ひたり。

今は如何でかためらふべきよ、

主よ、主よ、われを救ひ給へよ！

## 異郷の月

地の上なる神の庭、  
エデンの園にあらねども、  
天地ひらけ初めしより、  
國の榮のいやまし、  
アステク人の夢のあと、  
トルテク人の代々のほえ、  
『時』てふ蔭を押しつけて、  
迎るもうれし其のかみを。

白雪つもる其の高峰、  
みづすみかへる此の淡海、  
ありし昔を知れとてや、  
いさほの跡をさぐれとや。  
招くが如く呼ぶとてく、  
雲はかゝれり且つはれつ、  
波も寄せてはまた返す、  
昔のまゝに今もなほ。

ちまたに響く人の聲、  
今は聞えずなり行きて、  
車ひくなる馬すらも、  
厩に夢や結ぶらむ。  
三五の月は空高く、  
澄みわたりつゝ白雪に、  
得ならぬ色を添へにけり、  
湖水に姿をうつしけり。  
實にも榮華は水の泡、

生ひて繁りて其のはてに、  
枯るゝは獨り樹のみかは、  
蕾ひらけて且つ散るは、  
なご花のみに限るべき、  
人も此の世も草木にて、  
生ひて繁り繁りては、  
枯るゝ生命の定めあり。  
モクテスマの世、コルテスが  
軍のほまれ且つ榮え、

且つ消えマキシミリヤンの、  
チャプルテペックの王宮に、  
帝の冠さたりしも、  
またくひまの事なりき。  
自由共和の民草の、  
繁るもあはれ今の程。

隈なく世をば照らすてふ、  
今宵の月も明日見なば、  
玉のまるさは跡もなく。

缺けて見ゆらむ曇りなき、  
今宵の空も時経なば、  
雲や蔽はむ雨やせむ。  
いざや今宵の月かげに、  
思をよせむ夜もすがら。

世のはじめより變りなき、  
月にはあれと宵ごとに、  
なれの姿ぞかはり行く、  
満ちては缺けつまた満ちつ、

おなじかはりを百千たび、  
くりは返せど奇しきまで、  
その折々に新らしく、  
生れし如く見ゆるかな。

おなじ一つの月にこそ。  
エホバの神の手になりて、  
よしと見られし其の月も、  
ユダヤの野邊に羊かふ、  
タビデの友のその月も、

カルバリ山に血しほたる、  
主の十字架をとふらひし  
月も一つの月にして。

幼き時にふるさとの、  
山のはに見し其の月も、  
和知の川瀬に棹さして、  
なかめし月も一つなり。  
浪華の浦に權とりて、  
歌ひし月も韓國の、

絶影島に見し月も、  
おなじ一つの月にして。

マニラの濱の夕風に、  
涼しと見つる其の月も、  
いとしき妹ともろともに、  
樂しと見つる其の月も、  
二人をへだつ我が中に、  
淋しと見つるその月も、  
今宵<sup>△</sup>メヒコに見る月も、

かはりなきこそ戀しけれ。

清けき戀の涙こり、  
かゞやく月の光なれ。  
互に手をば取り合ひて、  
別を惜む戀人に、  
幾度逢ひしなれや月、  
夫をば思ひ妻をこひ、  
涙にむせぶあはれさを、  
幾度見つるなれや月。



世のわづらひの雲霧に、  
曇り勝ちなる心さへ、  
月の光にあひぬれば、  
眼ひらけつありし日の、  
ありし事ども浮かべ來て、  
萬感胸に滿ちわたり、  
異郷の空を仰ぎつゝ、  
心故山の天に飛ぶ。

わが生命なる妻よ妻、  
なれは吾妻に、われはしも、  
水や空なる大洋を、  
へだて、獨り茲にあり。  
吾妻てふ名のゆかりをば、  
説かひは愚か此の國の、  
東はなべて吾妻ぞや、  
妻こふわれしあるからは。  
今宵の月をわが妻は、

いかに見るらむ、日の本は、  
春とは言へどやうやくに、  
梅さき初むる餘寒空、  
淋し思に籠りゐの、  
夫なき閨の窓に立ち、  
まゝならぬ世をかこつらむ、  
月に涙をそゝぎつゝ。

やよ月よ月、わが妻に、  
傳へたまはれ、夜ひるに、

夫は故郷戀ひしとて、  
涙の淵に沈めりと、  
國にのこせし妻ゆへに、  
思ひみだれて折々は、  
心も狂ひ妻ゆへに、  
焦れて死なむばかりぞと。  
傳へたまはれ、わが妻に、  
夫の望みはいとをしき、  
妻とかたみに手を取りて、

共にはたらし共にいね、  
共にやすらひ共に起き、  
のどけく波に浮く鴛鴦の  
夜ひるともに憂なく、  
暮さむことのつぞと。

\* アステク人及トルテク人はメキシコ元始の土人なり

\* 白雪つもる高峰はポポカトペトル、シウアトウアト

ルの二死火山

\* 湖水及テスコ、湖、ソチミルコ湖等

△メヒコはメキシコの西班牙音

## 断腸

さ  
ち  
子

潮風すごき荒磯に、  
よせて碎けて散る浪も、  
ひまなく物を思ふわが  
たきつ心にくらぶれば、  
物のかずかは。其のむかし、  
春雨けふる夜もすがら、  
花の宿りの大森に、  
甘き夢見し朝より。

胸のうれひのむら雲も、  
晴れて消え行く戀の峯、  
のぼりつくせる身にしあれば、  
松にすくへる比翼鳥、  
長かる末の末までも、  
はなれじものと誓ひしを、  
浮世の風のいどつらく、  
かはしかねたるつばさかな。

世にもいとしき我が夫の、  
いともゆかしき面影を、  
思ひしのぶのしのぶぐさ、  
涙の露をたゝえつゝ、  
千々にみだれつ靡けども、  
かゝるべしとは白雲の、  
八百重の潮路へだつれば、  
心もくまぬ妻よとて。  
いかりますらむ我が背には、

にくみ給はむ此の身をば、  
君の怒りとにくしみは、  
骨をもさざむ劍ぞと、  
いとこゝ恐れをつよければ、  
ねむる枕の夢にさへ、  
おびやかさるゝ今宵しも、  
つら離れたる雁がねの、  
嵐にむせぶ細き音を、  
子にわかれたる親鶴の、

月になくなるあはれ音を、  
肌さむそゝる堪へがたき、  
淋しき床にきく時は、  
今の我身とたくらべて、  
腸を斷つ憂き思、  
衣の袖ぞぬれまさる。  
うき露霜のぬれ衣、  
花のたもとは色あせて、  
むらさき匂ふあやの帯、

さめ行くまゝに任せたり。  
あはれ黒髪かざることも、  
玉のかざしをさせばとて、  
よろこぶ人のなきものを、  
見すべき君し遠ければ。

一夜を千夜の思ひにて、  
待ちわびにたる玉章も、  
常には似ざる墨の色、  
いと悲しき筆のあと、

『なれは他人の妻なる』と、  
いからせ給ふ言の葉の、  
ことはり深くしるまゝに、  
怨まむ術も無くて只だ。

あはれ我が脊の君ゆるせ。  
われは涙に奥山の、  
おどろが中にかきこもり、  
世をうぐひすともろ聲に、  
心の限りなげかなむ、

塵かきこもる巷より、  
人草しげき大路より、  
谷の岩木のなつかしや。

しかは思へどいとほしの、  
夫を見捨てゝいかでわれ、  
柴のあみ戸の暫らくも、  
ながらふべしや仇し世に、  
うらみは長さ大井川、  
そこに沈まむ覺悟さへ、

ふたゝび三度きめしかど、  
君にひかるゝうしろ髪。

千筋にあらて一筋に、  
逢ふといふ日をたのみにて、  
うさもつらさも忍びつゝ、  
つなぐ命としら櫛の、  
若葉に結ぶ露の身も、  
玉とみがきて時を得ば、  
夫の冠をかざらむと、

心の駒をはげましつ。

教の庭に下り立ちて、

蟹なす文字の八千卷を、

學ぶとすれど折りくは、

小き胸にたなびける、

迷の雲の足なやみ、

浮世の外の墨染の、

たもと戀しう泣きにけり、

妻てふ身にてありながら。

水火の中も手をひきて、  
入らむねがひのわれなれば、  
八重の潮風あらくとも、  
おそるべしやは海士小舟、  
君をみるめの生ふと聞く、  
メキシコ灣に棹さして、  
身にあまるべきさはひを、  
からまくほしとあせれども。



こゝろながらの川鮎が、  
うれしき瀬々にのぼるべき、  
時をば待たでいたづらに、  
うき瀬とかこつ愚さよ。  
人も通はぬ谷そこの、  
朽木にまじる岩つゝじ、  
言はぬ思ひもくれなるの、  
色に咲く春なからずや。

ときはの松の紅葉して、

山は海ともならばなれ、  
かたみにかはす真情は、  
かはらじものと誓ひてし、  
かの睦言を忘れずば、  
暫し別れてあるとても、  
何うかるべき事やある、  
いらち給ふな我れにしも。

操なしとのさげしみか、  
あな悲しやな斯くばかり、

いとしき夫に疑はれ、  
何おもひでの命ぞと、  
なげ、ば胸ははりさけて、  
さらでも寒き草の床、  
わびしさ堪えず此の日頃、  
降りこそつゞけ袖時雨。

深き御恩恵うたひぬる、  
去年の今宵ぞ慕はるゝ。

淋てき閨にねもやらず、  
起きもえやらず我が妻の、  
寫すがたを眞胸に抱きしめて、  
我が唇におしあてつ、  
去年の今日をし偲ぶれば、  
思は千々に身は一つ。  
異郷の曉鐘かねの聲冴えて、  
いよ、亂るゝ我がこゝろ。

\*

\*

\*

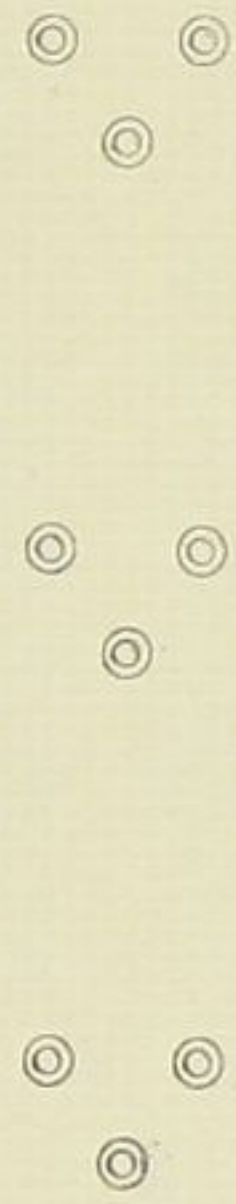
\*

月

入相の鐘きゝあへず、  
玉なす露をふみわけて、  
涼しき風に吹かれつゝ、  
月見んとこそ出でにけれ。  
今宵は星も光をば、  
月に譲りてかくれけり。  
雲も心のありけるか、

空にかゝれる影もなし。

野邊にはわれの外はなく、  
空には月の外は無し。  
見る、我が心いつとなく、  
月と一つになりけり。



花 染 衣

さ  
ち  
子

うち重ねたるくれなるの、  
初花染の戀ごろも、  
たぐわなき香にしみぬるは、  
君が心の咲き出で、  
わらはが胸に移し植ゑし、  
まことの戀のしるしかや。  
よし浮世には風たちて、

雨さへあらく注ぐとも。

散るべき花にあらされば、  
さむべき色にあらされば、  
のどかに笑めよ、末かけて、  
うらゝに匂へいつまでも、  
なれがゆかしき花片に、  
しげくもおける白露は、  
澄み渡りたるわが戀の、  
あくまで清き様見せて、

心ゆるすなやよ胡蝶、  
ほゝゑむ花は多くとも、  
まよひて行かばあだし世の、  
塵やけがさむ、なが肌を、  
風もかよはず雨もらで、  
千代に八千代にしほれざる、  
初花染のわが袖は、  
なれがやすけき花の宿。

### 去年の令日

かたみに思ふまごゝろを、  
かへりみたまふ大神の、  
ゆるし嬉しく蒙りて、  
つなぐ縁の糸のはし、  
天地つきむ末までも、  
かはらずかへじはなれじと、  
妹背のちぎり結びぬる、  
去年の今日こそしのばるれ。

空はほゝるみ鳥うたふ、  
春の彌生の一しほに、  
樂しかりける去年の今日、  
千種の花に飾られし、  
エホバの神の宮きよく、  
澄みぞ渡れる琴の音は、  
祝の筵開くとて、  
とゝろく胸にひゞきつゝ。

祭壇ちかく右ひだり  
ならび立ちぬ新婦と、  
新郎こそは幾年か、  
此の幸與へ給はれど、  
日ごろ祈りし二人なれ。  
神と人とのそが前に、  
誓ひも堅く手と手をば、  
握りかはせし去年の今日。  
握りかはせし手と手より、

溶けしまごゝろ行きかよひ、  
心も一つ身も一つ、  
一つになりし身ながらも、  
二人の顔は血に満ちて、  
うら恥かしき四つの眼は、  
見あげもやらずひそやかに、  
握れる手をぞ眺めける。

『天にてつなげ此のゑにし、  
二人は己ひごつに一体なり。』

悪魔も人も神ならで、  
得やは分たむ離るな』と、  
うれしき神の宣言を、  
夢路を辿る心地にて、  
互の胸の底ふかく、  
刻み込まれし去年の今日。

落ちなば落ちよ空の星、  
山は海ともならばなれ、  
なれはいとしの我が妻ぞ、

われは變らぬなが夫ぞ。  
かぎりなき世の末かけつ、  
永久なる『愛』にむすばれて、  
偕に老ひなむ喜ぶの、  
初めの日なれ去年の今日。

二人がなかの新しき、  
望に胸は満ちわたり、  
なほ行末をはかりつゝ、  
楽しき家をつくりなし、

春風つねに匂ふてふ、  
エデンの園をまのあたり、  
うつし出ださむ願ひもて、  
生れ出でにし去年の今日。

戀人なりし時代ごきすぎて、  
世をはぐからず妹よ背と、  
呼びつ呼ばれつ縋り合ふ、  
縁むすびし去年の今日。  
一つ車に乗りあひて、



羨む人の中走せつ、  
ハニームーンの旅ごろも、  
かはせし日こそ戀しけれ。

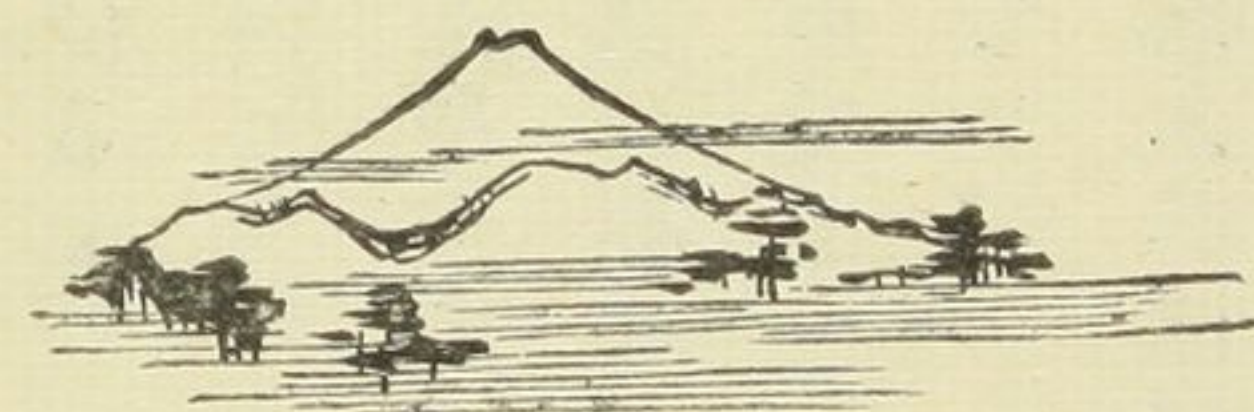
鴛鴦の衾はあたゝかに、  
夢は飛び行く天上の、  
樂み何にくらぶべき、  
盡さぬ寐ざめの睦言に、  
戀ひ渡りぬる昔時をば、  
語り明かしつ大神の、

深き御恩恵うたひぬる  
去年の今宵を慕はるゝ。

さみしき閨に寐もやらず、  
起きも得やらず我が妻の、  
寫真胸に抱きしめて、  
我が唇に押しあてゝ、  
去年の今日をし忍ぶれば、  
思ひは千々に身は一つ、  
異郷の曉鐘かねの音冴さえて、

附

録



いよゝ亂るゝ我がこゝろ。

ふふ唄

巴山人

明日は晴天ぞ知らせ顔なる夕映の、いまの今  
まで、西の海原一面に茜色を流し、が、浦の苦屋  
に夕煙立ちのぼりて、磯馴松の蔭より段々と闇う  
なりぬ。

岸に寄る波は泡と碎けて白う、彼方に遠く燈臺  
の光り幽かに煌きつ。やゝありて、十六夜の月は  
皎々と波上に懸りしが、水天彷彿として見渡す限

りなきを、沖は藹深く閉ぢ籠めたれば、何處にそれと見定むるやうはなけれど、朗かなる船唄は沖の遙かに聞ゆなり。

朗かなる船唄は次第に高うなり來て、近づくまゝに艫の音さへ加はれり。

この船唄、この艫の音を聞きつけてや、磯邊近き苦屋を走り出でし十四五ばかりなる、賤の少女の美はしきが、

「歸へり給ひしか、兄様や、待ち草臥れたり。聲音愛らしう、沖なる藹に向ひて呼びぬ。」

「お、今歸へりしぞ、遅うなりし。」

應答のありしと同時に、藹押し分けて顯はれたる漁船一般、見る見る内に磯へと着きぬ。

年なほ二十歳には足るまじけれど、身体逞しき少年は棹の手を止めて、大なる螺の中には得物數多満ちたるを、輕げに擔ぎながら漁船より上陸りて、思はず少女と顔見合はせて、互の頬に微笑を漾べつ。二人は相携へて苦屋に入りぬ。

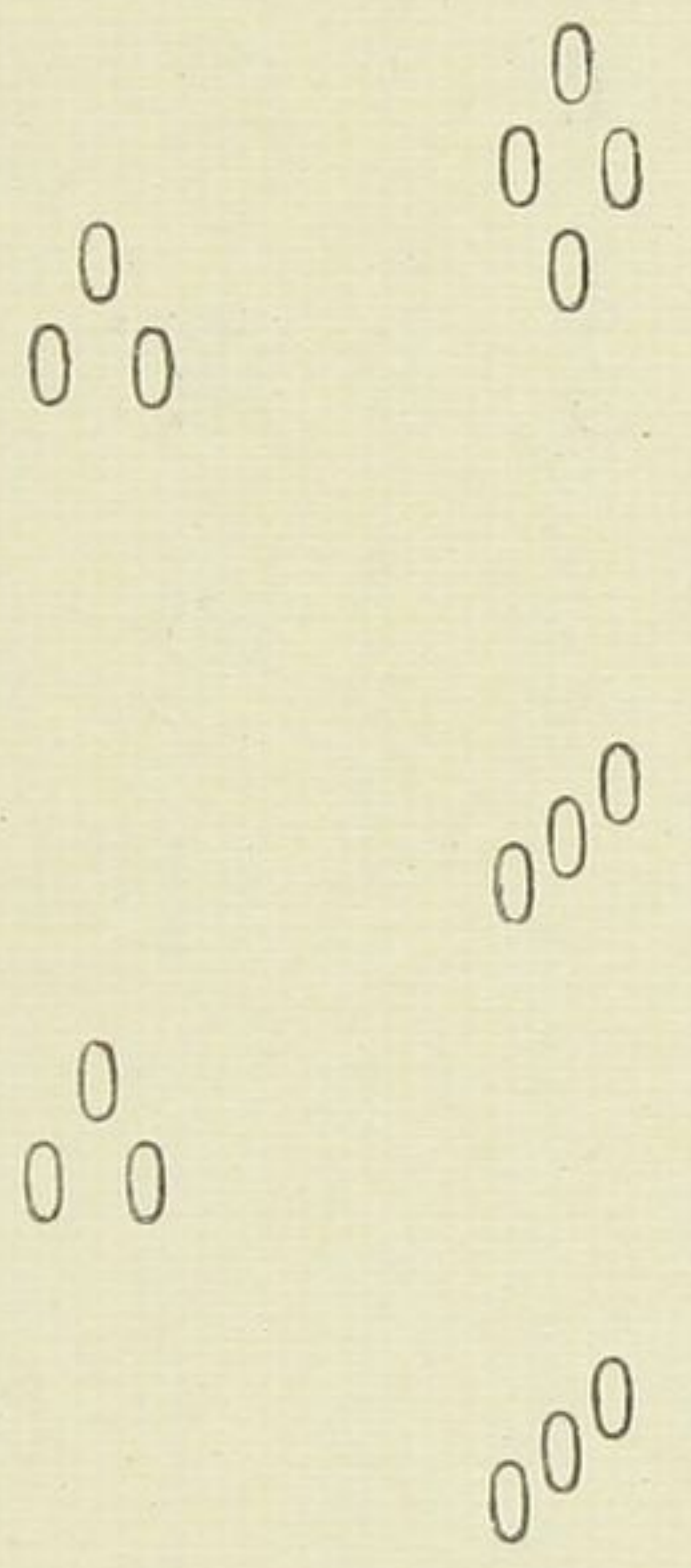
\* \* \* \* \*

夕な夕な、少年は少女に迎へらるゝを樂しみつ、  
少女は少年を迎ふるを樂しみつ、かくて、二年が  
程は異事なく月日を送りぬ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

夏の末なりしが、暴風雨のありてより以來、如  
何にやしけむ、少年の朗かなる船唄は沖に聞えず  
なりし。されど、夕な夕な、少女は今も變らず濱  
邊に立ち出でゝは、四邊に誰一人對手もなきに。  
「歸へり給ひしか、兄様や、待ち草臥れたり。  
と沖の方に愛らしく叫びて、いと淋しく笑めり。

されど、されど、少年の船唄は聞えずなりし。  
(明治三十年十月作)



雲無心

湖山人

落葉の村

(上)

好い天気てんきである。  
身みにしむのは、初冬しよとうの梢こすねを吹ふく風かぜのひびきであ  
る。

『まあ、さうかね、女をんなの容貌きりやうの美いいのも、やつぱ  
り善よし悪あしてもものだね。』まばらになつた杉垣すぎがきの中なか

から、眞白まっしろな一疋びきの鶏にはどりが飛び出だして、けたまし  
い聲こゑを立てた。

『人の行末ゆくすゑといふものは、眞個ほんごに何うなるものだ  
か知しれ無ないね。』片手かたてに今洗いまあらひたての大根だいこんを持もつて、  
片手かたてで、まつはりかゝる亂みだれ髪けをかき上げながら、  
尙言葉なほことばをついけやうとして居ゐる此こゝの家いへの女房かみさんと、  
手拭てぬぐひを冠かぶつて、腰こしに鎌かまをさした年頃としごろ四十よじゅうぐらゐな  
女をんなと、力ちからの無ない顔かほをして、其その癡くせ瞳ひとみばかりは、絶た  
えず急いそがしさうに動うごいて居ゐる一人ひとりの老婆らうはと、まだ  
解ごけあへぬ霜しもの門口かどぐちに立たつて、何なにごとをか、例れいの、

ことごとくしげに語り合つて居る。

自分は、格別の注意も拂はず、此の家の前を通り過して、何時も散歩する時のやうに、落葉の道を北へと折れた。

右方は、覺束ない垣が築かれて、其の未は、小さな杉林に接して居る。垣の中には、家が二軒ある。皆最早畠へ行つてしまつたのか、人の居る氣配はせぬ。が、此處に稚木の楓が只だ一本、將に延びんとする枝を曲げられて、無殘にも垣根の補にされつゝ、尙ほ散りのこる一枝の秋をかざして、

此處を通る人々に、何ものかを訴へ顔である。

一方は、岡の裾を切り落したやうになつて、一面に黄ばんだ草が生ひしげつて居る。其の上には、幾干の雑木があつて、是れを率ゐて居るもの、如く、高らかに立つて居るのは、何百年以前から此の通りだと稱へられつゝある榎である。併し、榎には、最早一片の葉だも無い。

凡そ廿歩ばかりにして、此の道は左右に分かれて居る。道が分かれるところは、三角なりに突き出た笹藪である。一体の石の地藏尊が、兀焉とし

て其處に安置されてある。眞に安置である。露天で、圍なしで、只だ苟にせしもの、如く地上に置かれたのみであるが、風にも雨にも、地藏尊はいと安げである。併しながら、悼むべし地藏尊の鼻と耳は、残る處なく欠け果て、居る。自然では無い、慥に人の手に依つて傷けられたものである。半ば枯れた葉を持つた、丈五六尺の笹が、其の周圍を取り巻いて、いさゝ観るもの、心を動かす。世は今が盛りであらうか。地藏尊が此處に立てられた時、村人は何ういふ信仰を持つて居たであ

らう。今は是れに向つて禮拜をさげけるものは、此の村で有名な子煩悩の老嫗と、たま〜通りかゝる、六部の外には無い。ある人の説である、宗教心は、何人にも差別が無いけれども、信仰の目的物には、人に依つて違ひがある、時代に依つて相違がある。人は其の頭腦の發達に隨つて、各の心を満足せしめるに足る目的物を書く。信仰の目的物が變つて行くのは、要するに進化であること。進化論の勢力は恐ろしいものである。廢滅せんとする祠、塵埃のなかに捨てられた地藏菩薩、是れら



にたむけて、只だ夫れ進化であると言ひ得るであらうか。自分は、不幸にして心弱く生れた。何の行人に對しても、長へに温然として立つた其の姿を見ては、感なく通過することはできぬ。美術鑑査家の眼には、何と見えてもかまはぬ、何人の手に依つて、刻まれたものであらう、得がたい佛さまである。何時立てられたものであらう、意味ある紀念物である。自分は、此處を通る度に、必ず斯う思つた。竹がサラ／＼と鳴つて、落葉まさに暮れんとする或る夕、獨り此處にゐんで、そい

る詩を思つたこともあつた。

見かへりながら、自分は道を左の方へ取つた。兩側に、雑木は藪である。藪の盡きた處は墓場で、雑木は漸く疎になつた。墓場には。まだ生々とした塔婆が、六個ばかりも見える。まだ、雨に濡れ無い提灯もあつた。ふと、枯れかゝつた杉の木の下を見ると、昨日此處につくられた一つの新墓があつた。折りから、風は烈しく此處を吹かなかつた。太陽は、同じ光を此處へも投げかけた。奥の方には、小鳥の聲が聞える。冷眼にして行けば、

何の事も無い場所であらうが、自分は、敢へて急  
歩し得なかつた。嗚呼、昨日此の地下に、其の骸  
を埋められた人があつたのである。老いた人か、  
若い人か、男か女か、自分は寧ろ近よつて見るを  
欲しなかつた。

人の死が、何故に悲みの源泉であらうか。何人  
も、墓地を指して、涙の庭といふ、何故であらう  
か。散りかゝる落葉は、正に人の死である。さら  
でも、落葉の景に對すると、何となく寂寞を感じ  
る。憂愁を感じる。凄凉を感じる。そして、更に

人間の死を聯想して、自分は言ふべからざる悲哀  
を感じる。木の葉は、冬になれば散るものとは知  
つて居る。今落ちて、來年になれば、又青々と  
した美しい葉ができるとは能く知つて居る。が、  
足に落葉を踏み、袂に落葉を飛ばし、今までは空  
を蔽うて居た梢から、澄み通つた冬の天をのぞん  
では、心細い、頼み少ないといふ感は、到底其の  
念頭から追ひ拂ふことはできぬ。人間といふもの  
は、我慢な、強がりなものである。が、殘勝にも  
今まで任つたものが無くなると、兎に角も悲しさ

を感じるのであつた。

考へて見ると、木の葉は落ち盡しても、枝は枯れても、幹は尚ほ生きつゝあつたのである。人の死といふものも、亦斯くの如きであらうか。差別界にある人は死んでも、平等の人は、決して死な無いのであらうか。さらば、人の死や悲しむに足らぬ。而かも、是れを悲しむ所以のものは、落葉と同一である。在つたものゝ無くなるのが悲しいならば、何故在るうちに其の涙を分ち得なかつたらう。さらば、世の罪は、少くも其の半を減じ得

た。今更ながら、人は我儘なものである。

尚ほ半ば霜にかたまつた轍の跡に随つて、自分  
は、一度此の墓地にとまつた歩を、徐に先の方  
へと移した。轍の跡は俄に亂れた。人の聲がする。  
ふつと眼をあげると、道は十字になつて居た。稍  
々廣く前に横はつて居るのは、村の本道である。  
羽織を着た人が通る。荷馬車が通る。物うりが通  
る。村ながら、人爲の姿は、動ともすれば自然の  
影を壓せんとして居る。

藁葺の小さな二軒長屋の前に、古びくさつた一

臺の人力車がある。蹴こみに腰をかけて、一人の老車夫が、大息を吐きながら草鞋を穿いて居る。其の顔は皺に満ちて、其頭は己に三分の雪をのせて居る。「お前さん、まだ出かけ無いかい。」女房らしい。併しながら、慳貪な聲である。「今行くんだよ。寒いで一寸草鞋が穿けねえんだ。」老車夫の聲は、沈んで居た。彼れは、只だ草鞋が穿け無い爲めに、早く立ち得なかつたのであらうか。老は冬である。冬は收め藏するの時である。果は熟し、稻は刈られ、今年の冬も己に半を過ぎたので

ある。彼れは、何を收めたであらう。恐らく、悔恨と失望と煩悶の外に、彼れは何物をも藏しなかつたであらう。是れ、彼れ自らの力が至らなかつた故か。抑も風雨彼れに幸しなかつたが爲め乎。嗚呼、落葉の天は、人に追想を促すの時である。

《下》

足は、おのづから思ひを轉せしめる。感あるもの、情が薄いのでは無い。時は正に、變化の主権者であつた。

木を切る音が聞える。極めて静かな、極めて悠々たる鋸の調子である。此處は、鎮守の森の裏手であつた。立ち籠めた老杉は、浮世の冬を知らず顔に、眞直に其の幹をのばして、そして社殿の周圍を取り巻いて居る。下は笹藪である。社殿の後には、小丘をなして、落葉に彩られた二筋の細徑を畫いて居る。微かに太陽の光を受けた笹葉は、其の小丘に随つて、高低をなして居た。

社殿の横に、材木が積んである。木の葉と相交つて、鉋屑が散り亂れて居る。枯枝をあつめた焚

火は、風に煽られて、時々思ひ出したやうに焰を吐いて居る。新らしく、此處へお宮が建つのであらうか。印半纏を着た一人の大工が、無意味に、併しながら極く忠實に其の手を動かして、一本の丸太を切つて居る。遙に離れて立つた鴨脚の大樹は、風吹くごとに、雨のごとく其の葉を落し、且つ飛ばし且つ散らしつゝある。

『ちよいと、辨當を持つて來ましたよ。』鳥居の側から、急に人影があらはれた。年の頃は、廿二三であらう。粗末な風をして居るが、色の白い、温

和しさうな女である。疑ふまでも無い。是れは大工の妻である。

『さうか。早いな。』大工は鋸を止めて、妻の方を振り向いて、眼に新しい光を加へて、口元には微笑を浮べた。『お前、愛兒は何うしたんだい？』  
彼れは、掌に唾を飛ばして、再び手を鋸に加へつゝ言ふ。

『寐てますの！』妻は、良人の働きを熟視した。  
『大きな杉ね。』短かい、適切を欠いた言葉ではあるが、是れ、良人の勞を慰めんとする、妻が心づ

くしの影である。慰さめとしては、誠に拙い言葉である。が、拙いといふのは、只だ形式に過ぎぬ。誰れか、此の片言のうちに満ち溢れた朴素な、優しい、清らかな精神を、賞賛し無いで過ごさうや、此の大工は、誠に幸福な男である。

斯ういつて、妻は、良人の手許に寄せて居た眼を、あらためて四圍の光景に轉じた。枯れた笹葉は鳴つた。鴨脚樹の葉は落ちつゝけた。泥にまみれた犬の兒が、覺束無い足つきで、御手洗のほとりをさまよつて居る、誰れがした惡戯か、森の西

端にある草は、ただ中に一本の薄を残して、方二尺ばかり焼かれて居る。彼れは、此の景に依つて、何ごそを感じ得たであらう。

彼れは、此の光景に對して、あまりに多くを感じなかつた。彼れの顔色には、更に一閃の變更をも覺へなかつたのである。が、近く起つた子守歌を聞くに及んで、彼れの態度は、著しく變つた。

『お茶はあつて？』俄に、妻は其の歩を焚火のほとりに移して、煤けはてた土瓶の蓋を取つて見た。『あゝ、能く沸いてるだらう。』同時に起つた良人の

聲である。『もう何も用はありませんね。』『あゝ。何うも御苦勞。』良人の眼と妻の眼と、ある光を交換して、やがて妻は去つた。鳥居の下まで行つた時、小走りの彼れは、一寸振りかへつて、更に良人の、將た且つ其の妻を見る眼に出遇つた。

好い畫だ、自分は此の畫を見て、羨ましく思はないでは無かつた。併しながら、それは只だ一部の感に過ぎない。末は、羨ましいと言ふより、寧ろ美しいといふ感が、全く自分の頭腦を支配したのである。誠に好い畫である。

自分の取つた道は、暫らくにして間道になつた。道と畠の境に、茶の木が、疎ながらも一列に植ゑられて居る。他の一方は、田である。田と道との間には、すつかり枯れて、而かも尙ほ落ち無い葉を持つた櫛の木が、極めて不行儀に植ゑられてゐる。

畠は、漸くのび出でんとする麥と、次第に黄ばみ行く大根とである。畠の末に、同じ藁葺の家が三軒見える。新らしく張られた白い障子が、半ば開けてあつて、日は麗らかに家の中へさし込んで

居る。軒には、洗ひものが乾してある。縄で編んだ大根が釣つてある。人の姿は見えぬ。静かさは此の上も無い。そして、何處と無く豊かな、安らかな、楽しさうな影が、家の中に満ちて居る。都の家とは逆である、表は悠々として居ても、裏を覗くと、思ひの外慌てかへつて居る、是れが市の家の常である。殊には、年も暮になつて、表から既に慌てかへつて居る今、其の家の中は、抑も何んなであるだらう。能く此の、素質な小さな田舎家に對して、恥づべき處は無いであらうか。驕奢



を形にあらはしたものは、都である。質素を形にしたものは、田舎の特色である。年の暮になると、都會は田舎に征服される。質素は驕奢を屈伏せしめる。併しながら、質素の時代は短日月である。内に顧みずして、表を飾るのが今の世の所謂伶俐者だつたのである。

田の稲は、最早悉く刈られてしまつた。一年の田の功勞は、此處に全く成し遂げられたのである。畔は、黄ばんだ草をもつて包まれ、田は、半ば掘りかへされて居る。一念夏の田と思ふと、うたゝ寂

寥を感じる。とは言ふものゝ、切株に残したまゝ、或は方形に、或は長方形に、極めて不秩序の中に一種の整調を有して居る此の田を見渡すと、何處となく、安心、満足、高慢の影がはの見える。

土橋を渡つた。下は清らかな小川である。岸は雑木と落葉と枯れ草とで、ところごとく霜に固まつた土を見せて居る。川は迂曲して、何の音楽を奏しつゝ、枯れ薄の風に起伏する遙其方へ流れて、其の姿をかくした。落葉の一片がふいと、水におちた。川は夫れを弄びつゝ、只だ夫れ流れて行く。

時と共に流れ去る此の水は、何れに達して其の運動を止めるであらう。世は廿世紀である。此の水は、尚ほ流れつゞけるであらうか。思ふ、此の水の流れがとゞまつた時が、即ち我が此の世界の休止する時ではあるまいか。何年の後に、水のながれが止まるであらう。一度は、此の水の流れ止む時が来るであらうか。然る時、此の平和なる村は、何うなり果てるであらうか。矢張り、此の儘であらう。平和が冷たくなるばかりである。流動の無い、永久の平和が来るばかりである。而して、而

して然る時、此の身は何となるであらうか。此の精神は、何うなつてしまふだらうか。後の方で、五六人の小供が、落ち散つた木の葉を拾ひ集めつゝ、何事をか切りに語らひ合つて居る。ふつと、其の一聲が耳に入つた。『最早幾度寝るとお正月だい。』

將に進み入らうとする榎林へ、急に風が突入した。落葉紛々。我が頭脳は、いとゞ其の統一を失つてしまつたのである。

(をばり)

原頭の月

《上》

文明とは、果して何を言ふのであらう。所謂世の進歩なるものは、吾人が理想の世界に近づきつゝあるのであらうか、將た遠りつゝあるのであらうか。驛員に切符を渡して、信濃町停車場を出ると直ぐ、ふと頭腦の一部に起つた第一次の聲である。

世の中には、何故馬鹿と伶俐なものがあるので

あらう。併し、待てよ。其の馬鹿と伶俐なものとは、どちらが幸福であるだらう。交番を左へ曲がつて、渡るとも無く橋をわたつて、何處からとも知れず。急に考へ出された第二次の問題である。

泣きたい時に泣かなかつたり、可笑しい時に笑はなかつたりするのが何故傑いのだらう。東宮

御所工作場の板園を右へ折れて、只だ足だけが、此の道を歩く理由を知つて居るといふ風に、極めて無頓着に歩いて居る時、忽ち思ひ浮ばれた第三次の問題である。

『まあ、良いお月さままだこと！』沈静な夜の空気を  
を通して、慥に女である、細い、優しい、少しく  
甘へた聲が、極めて和かな調子で自分の耳へ入つ  
た。さうだ。自分は此の月を樂んで、此の夜ふけ  
此の原頭を通過するのであつた。何故今まで月を  
見ないで、こんな滿ら無い事を考へて居たのだら  
う。信濃町停車場を出て、直ちに空をながめたな  
らば、もつと早く、心の上までも蔽ひかゝつた都  
塵を拂ひ落して、清らかな月光に此の胸を澄まし  
得たものを。斯ふ思つて、自分は俄に立ちどまつ

た。そして、自分のうら寒さうな姿の、離々とし  
て風に戦ぐ草上に、小さく稍々朧にうつゝて居る  
のを今更らしく見て、急に月ある方をながめた。  
嗟乎、何といふ美はしい景色であらう！飽かずも  
月を見た眼を轉じて、此の廣茫たる青山練兵場の  
四圍に溢れかゝつた月光をのぞんだ。自分は、此  
の時已に此の原を半ば横ぎつて、千駄ヶ谷の方向  
に行きつゝ、あつたのである。  
只だ見る、此の原は一面深い、濃い霧をもつて  
包まれ、四聯隊の赤練瓦も、東宮御所工作場の板

圍も、霞ヶ岡の鴨脚樹も杉の森も、朧の中に其の姿をとめて居るばかりで、是れ正に茫漠たる煙の野である。幽にはためく數點の燈火は、何れも道を照らす光であらう。靜に立つて見まはすと、此の原は、無限の廣さを持ち、此の霧は、端なく立ちこめられたやうにも思はれた、灰色といふよりは寧ろ白い紗の如きもので、いや極めて淡い柔らかな綿のやうにも思はれるもので包まれた靄の地上を、五六歩ばかりも動く、動いた方は、已に何物も無くなつて、元わが立つて居た處は、ま

た白紗の地となつてしまふ。

此の霧は、下になる程濃くなつて、上に行くほど、月に近くなる程薄く、幽に、随つて鼠色を加へた。折り柄中空に懸つた月は、丁度十六日の、まん圓な姿で、其の光は、靄でもつて、少しく淡紫を添へた。近きまはりは、銀地に灰色と此の淡紫を染めかけたやうな雲である。其の雲と此の地上の霧と、相かさなつて、相つなぎ合つたと思はれる處に、只だ一つ、小さな星が睡さうに輝いて居る。此の外には、天地に何等の色をも認め

られなかつた。

此處は、毎日練兵のある處である。一つの號令で、千の兵士立どころに列を動かす處である。十人が吹く喇叭の聲で萬人一様の歩武をなす處である。人間の規律が何れだけ能く保たれるか。階級の制度が如何に能く守られるが、國家の觀念が如何に能く人を服従せしむるかを試めす所である。あゝ、此の間、觀兵式があつた。至尊は親しう此の地をお踏みになつた。御乗馬の蹄影は、何れの處に印されたであらう。分列式は、此のあたりよ

り彼のあたりへかけて行はれたのである。併しなから、此の原は今月下の霧にかくれて、何等の影をも止めぬ。

西の方にあたつて、水車の響が聞える。實に穩かな響である。終列車も通つてしまつて、今は瀛車の音は無いが、毎日、此の水車の音と瀛車の響は、絶えず相まちはつて、今と昔の物語を、急がしい間に取りかはして行く。が、響は、瀛車の方が強かつた。水車は、夜になつて、始めて其の悠悠たる響を人の耳に入れたのである。

突如として口笛が聞えた。其の音は、急に起つて、長く後を引いて、末は細く戦ひを傳へた。人が人を呼ぶのである。友を呼ぶのであらうか、男が男を呼ぶのであらうか。さりとは調子が優しさに過ぎる。是れは、慥に男が女を呼ぶのである。然り、暖い戀の息に、無限の樂しさを籠めた口笛である。

『美しいお月さまだこと！』『うむ、ゆつくり此處で休んで行かうよ！』男女の静かな聲が、幽かに夫れと見ゆる、松の樹の下に起つた。

(下)

此の月下、此の霧を通して聞えた口笛は、女を呼ぶ男の口から出て、男を待つ女の耳へ入つたのである。聲のした松の樹の下を見すかすと、姿は慥に男女の二人とは思はれるが、其の顔は少しも見えぬ。何者であらう、何を語るであらう。半ばは月光にひかされ、半ばは此の聲に引かされて、去りもやらず、自分は尙ほ其の場に足をどめめた。

『此の霧の具合は、何うも言へないのね。』  
『うむ。練兵場で、斯ういふ景色を見やうとは思

はなかつたよ。あゝ、併し、また彼様な汚い處で  
寐なければなら無いかと思ふと、眞個に厭になつ  
てしまふ。』

『どうね。……だけれども何れだけ考へたつて  
仕様か無いわ。』

しばらく無言となつた。傾けた自分の耳へは、今  
にも絶んとして居る、極めて細やかな虫の音が聞  
えた。何者だらう。自分は口の中で呟いた。

『おい、ね、此處で何か一つ合奏して行かうぢや  
無いか。』急に、思ひ立たやうな、男の聲である。

『まあ、今頃こんな處で？』と言つて、女の手が  
動いたかと思ふと、際だつて、鈴虫でも鳴くやう  
な聲が、僅に耳へ入つた。虫の音では無い、月琴  
の動かされた響だつたので。

『まあッてお前、お前は、此の良い月の前で、合  
奏するのが可笑しいのかい。』

『でも、何だか變ぢやありませんか。』  
思ふに、此の時女は微笑んで、亂れかゝつた後れ  
毛を小指でかき上げながら、凝乎と男の顔を見た  
であらう。



『あゝ、情け無いな、お前は最早さういふ氣になつてしまつたのかしら……斯ういふ處で合奏してこそ、ほんとに樂はあるのぢや無いか。えッ、性來音樂が好きで、笛を吹いたり月琴を弾くのでは無く、只だ食ふのに困つて、思ひついた自分たちが、併し、お互に、音樂を味ふだけの耳ぐらゐは持つて居たらうぢや無いか。』と言つて、男は靜に月を仰いで、女の答へを待つ様子であつたが、女はさし俯向いて、何の言葉も無かつたので、男は更に口を開いた。『斯ういふ事をし出してから最早

三月、毎日々々人の軒に立つて、吹奏した數は何れだけになるか知れ無いが、自分は、斯んな躰になら無い前に、ホーカイ節屋から是れを聞いたやうな面白味は、少しも感じたことは無い。音樂は、人の心を和げるものだ、音樂は人を樂ますものだと云ふが、吹いて居る自分たちには、苦痛こそあれ、何の樂みも無い。お前は、面白いと思つて月琴を弾いた事があつたかい。それと言ふのが、約り此の尺八の音と月琴の音を人に賣つて居るからだ。乃公は思ふのだ。只だ自分の樂しみに、吹い

たり弾いたりしてこそ。始めて音楽の面白味が  
あらうと思ふのだ。何時も、最早是れで今日一  
日だけは安樂に日が送られると思ふふと、俄かに  
身躰がだるくなつて、尺八を見るのも厭になつて  
しまふのだつたが、今晚は、此の月を見て、何と  
なく尺八が吹いて見たくなつて來たのさ。えッ、  
折角おぼえたものを、何時も人のなぐさみ物にな  
つて居るばかりぢや満ち無、一つ合奏して、思  
ひきり音楽をたのしまうと、思ふのだが、お前は、  
さういふ心地が起らないかい！』

忽ち月琴が鳴りはじめた。女は無言で、撥を取  
つたのである。返答は無かつたもの、絃は、其  
の胸の中をうつつして、一種の悲調を漲らして、か  
すかに寂しく鳴つた。女は、答へをしやうとは思  
つたのであらうが、今や昔しの事を、染々と語ら  
れて、追懷の情に咽んだあまり、恐らく返事がで  
きなかつたのであらう。

『可いかい。』男は、口を尺八にあてた。忽ち、  
人の心を震はすべき、何とも言ひやうの無い妙音  
が、細く出て、やがて太く廣がつた。一人が奏で

居るやうに、月琴と尺八は、巧に、極めて巧に合つた。曲は何であつたか、此の兩人は上手であるか下手であるか、そんな事は少しも知らぬ。自分分は心の底から、幽艶な、寂しい、うら悲しい感にうたれて、更に一種の寒さを覺えた。自分は、全身の血を耳もとに集めて、此の合奏を聞いたのである。

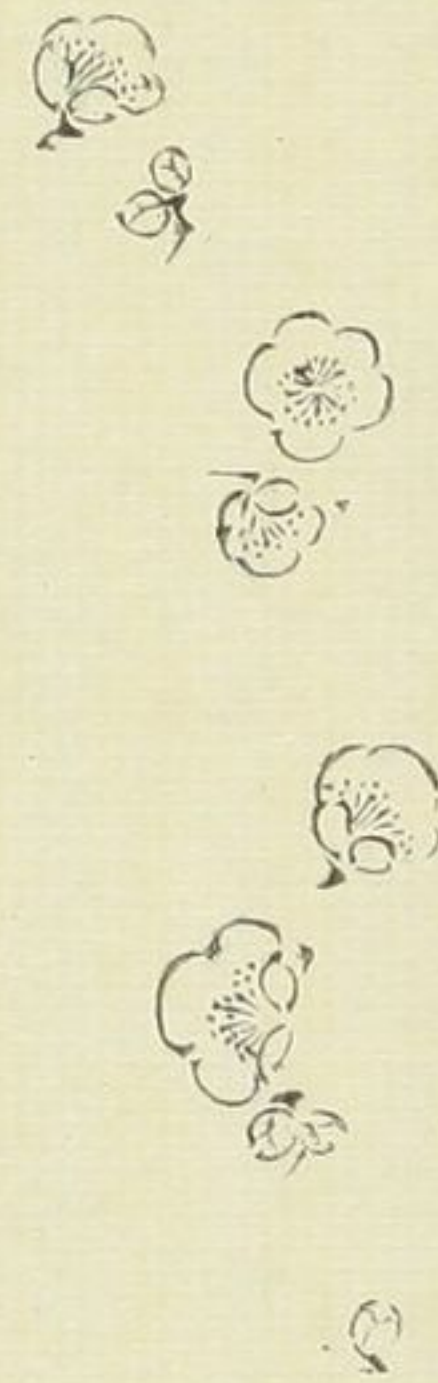
『ね、もう一曲!』是れは女の聲であつた。更に新なる絃聲が起つた。それに隨つて、笛は低く其の初を發した。梢をならして吹く風は。石を這つ

て行く水と其の節を同うし、哀猿腸をしぼるの聲は、秋虫草にすだくの音と其の調を均うして、相轉ばり、相もつれ、相つらなり、相斷え、唳々切々また悠々、坐ろに人をして、其の身の塵世にあるを忘れしめ、魂飛んで、月宮の前にあるかを思はしめた。嗚呼。何ぞ其の調のゆるくして而かも其の聲の切なる! 思ふ、金錢の前に、彼れ等は決して斯かる妙調をなさなかつたであらう。

已にして、合奏は止んだ。原を立ち籠めた霧は、更に濃くなつて、月色俄に朦朧を加へた。彼れ

らは何れへか行つたのであらう。自分は、只々茫然として、彼れら二人の名残をこいめた彼の松樹を見詰めたまゝ、時をも知らず、空しく此の月下に立ち盡したのである。

(完)



### 美育社設立の主旨

帝國の文明は著しく發達せり。明治の文華は實に長足の進歩をなせり。而かも、其の文明はあまりに乾燥ならずや、其の文華はあまりに赤裸ならずや。見よ、我が江湖の趣味は低落し盡して、明治文華の子、其の心今や野生の蠻人に似たるものあらんとす。

文明は現利の權化にあらず。現利の外に、文明が保有せる地域は極めて濶大也。我が社會は、一意現利を追ふに急にして、茲に此の濶大なる地域あるを忘れたり。濶大なる地域とは何をかいふ、

不肖等をして言はしむれば、其は即ち趣味也。文明の現利と相對せる文明の趣味也。

趣味は、現利の外に超絶す。人は、利をはなれて、能く平凡に生き得き。趣味あれば也。人は利をはなれて、能く艱苦に勞し得き。趣味あれば也。人は利をはなれて、能く悲痛に堪へ得き。趣味あれば也。而かも、趣味をはなれんか、人は一日も世にある能はず。悲しむべきかな、明治の才傑、此の利を養ふに專にして、而して此の趣味の陶冶を忘れたり。

不肖等微力をはからず、茲に美育社なるものを創設し、聊か我が美育の爲めに力を致さんとする

もの、是れ一に社會が趣味の欠乏と低落を憂とせざるを憂ふる甚だ多きが爲め也。不肖等、能く自らを知る。何ぞ後進鈍才の不肖等にして、世に多くを寄與するの能あるべき。されど、不肖等また能く誠意の天に通ずるを知る。不肖等、能ふ限り奮進して、趣味の陶冶と普及とを圖り、田圃に、道路に、家庭に、店頭に、工場に、より高くより清くより幸なる文明の影を宣傳せんと欲す。

是れを盡すの方法として、われらは先づ出版事業を取れり。此の出版に依つて、少しく所志を江湖に傳へ、而して後、また他の方法を取つて、飽くまでも趣味涵養の爲めに力を致さんとするも

の、是れ我が美育社の創立主旨也。

義人よ、仁者よ、唯物主義の弊に憤れる人よ、情の人よ、希くば不肖等の野勇を笑はず、不肖等の愚を笑はず、其の微衷を掬んで、幸に誘導賛助の聲を惠まれんことを。

美育社の事業は、前途尙は遼遠也。更に希くば、近き日の行動を目して、直ちに遠き將來を速断することなからむを。われらは、敢へて茲に、是れを記録するの用意を忽にすること能はず。

明治三十四年秋

赤木久太郎

謹白

黒田直道

狩獵の新  
手引

# 百發百中

河村伯爵題字  
鄭湖獵夫編著  
獨逸皇帝御愛  
犬口繪

一部五十錢 郵税四錢

狩獵必携の書とし江湖は如何に此の書を歡  
迎せし乎

國民新聞の評に曰く、

「遊獵の季節に此著ありしは歡迎すべし章を分つて「獵銃の卷」「射撃修練の

卷」「百發百中の卷」「野鳥狩獵の卷」としたる外附録として「獵犬談」「狩

獵法」其他を添ふ要するに遊獵の快樂を説き遊獵の初歩を教へて吾邦に於ける此種の野外遊戯を奨励せんとする者一編の遊獵談とも見なすべし既に其法を知得したる者は勿論之より其道に入らむとする者は是非共携帶すべきなり小冊子にして製本麗はしく、文辞また味ふの價あれば之をクリスマスマス若しくは新年の贈物となすも可ならんか口繪としたる獨逸皇帝の愛犬は遊獵家の好參考たるべく敢て江湖殊に初歩の遊獵家に此書を薦む」。

發 兌 元  
美 育 社

明治卅四年十一月卅日印刷  
明治卅四年十二月三日發行

定價金五十錢

編輯者 黒田直道

東京市麴町區三番町廿五番地

發行者 赤木久太郎

東京市四谷區片町十六番地

印刷者 掛川元明

東京府下豊多摩郡澁谷村大字  
青山南町七丁目一番地

印刷所 青山學院實業部

電話(新橋一八六)

東京市麴町區三番町廿五番地

發 兌 元  
美 育 社

不 許 複 製

特約販賣所

東京市神田區表神保町三

東京堂

東京市神田區裏神保町

上田屋

東京市京橋區鎗屋町

合資會社 北隆館

大坂市東區南本町

金尾文淵堂





